

佐賀大学国際交流推進センター 平成26年度年報

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University 2014-2015



佐賀大学

ANNUAL REPORTS

目 次

I. 国際交流企画推進室	2
1. 学術交流協定	2
2. 海外ネットワークの構築と情報発信	2
2.1 佐賀大学ホームカミングデー in スリランカ	
2.2 佐賀大学フェア in ペラデニア大学	
2.3 佐賀大学フェア in モラトゥワ大学	
3. 国際交流セミナーの開催	4
4. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	5
5. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動	5
II. 学生交流部門	6
1. 留学生受け入れ	6
1.1 留学生受け入れの概況	
1.2 佐賀大学短期交換留学プログラム (SPACE-E および J)	
1.2.1 SPACE-E 実施報告	
1.2.2 SPACE-J 実施報告	
1.3 平成26年度日本語・日本文化研修コース	
1.4 平成26年度日本語研修コース	
1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2014	
1.6 香港中文大学学生交流プログラム (短期受入れ)	
2. 学生の海外派遣	
2.1 本学学生の海外派遣概況	20
2.2 交換留学生の派遣	20
2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣	21
2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)	22
2.5 学生の海外派遣支援	30
3. キャンパスの国際化	34
III. 学術研究協力部門	37
1. 国際研究集会開催支援	37
2. 研究者海外派遣支援	39
IV. 地域国際連携室	41
1. 「平成26年度産学官国際交流セミナー」の開催	41
2. JENESYS 2.0プログラムによるインド理系大学生の訪問	42
3. 「平成26年度佐賀大学就職支援セミナー」の開催	43
4. 地域国際交流行事等への協力	43
5. 佐賀県との連携	44

I. 国際交流企画推進室

1. 学術交流協定

本学は学部・研究科での研究交流を主体とした協定締結が中心であったが、平成25年度より学生交流を主体とした協定の締結の重要性に鑑み、戦略的に国際交流を推進する必要性を認めた大学間交流協定を国際交流推進センターが先導することを決定した。その結果、平成25年度は、ヴィタウタス・マグヌス大学(リトアニア)、フィンランド・ユバスキュラ大学、オルレアン大学(フランス)との大学間交流協定を締結している。平成26年度は国際交流推進センターのイニシアティブによる協定締結はなかった。一方で、本学で博士号を取得し母国に帰国したOBが所属する大学との研究・学生交流が大いに期待されるとして、新たにインドネシアのブラウイジャヤ大学と大学間の学術交流協定を締結した。

また平成24年度より開始した香港中文大学人文学部と本学国際交流推進センターが立ち上げた双方向型の留学プログラムの継続実施および提供される質やサービスを相互に保証するため、平成27年3月に覚書を締結した。

【大学間交流協定の新規締結】

ブラウイジャヤ大学(インドネシア共和国)・国立大学・H26年4月14日

【短期学生交換プログラム覚書締結】

香港中文大学人文学部日本研究学科(中国)・公立大学・H27年3月2日



中島センター長(左)と
中野日本研究学科長

2. 海外ネットワークの構築と情報発信

海外ネットワークを構築するための一つの取り組みとして、長年、連携・協力のあるスリランカにおいて「佐賀大学ホームカミングデー」と「佐賀大学留学フェア」を以下のとおり開催した。

2.1 佐賀大学ホームカミングデー in スリランカ

【日時】平成27年3月10日(火)

【会場】ホテルトパーズ(キャンディー市)

【概要】

海外の協定校との連携の強化、並びに海外在住の卒業生や留学生が一堂に会し、佐賀大学関係者のネットワーク構築に繋げることを目的として開催するものであり、ペラデニア大学のサーリヤ講師と本学ラタナーヤカ教授による共同コーディネートで企画されたものである。在スリランカ日本国大使館の岡井朝子次席公使等の来賓に加え、ペラデニア大学副学長をはじめとする6人の学部長等関係者、佐賀大学卒業生や佐賀大学で研究を行った者及びその同行者等参加者61人が参加し、盛大に実施された。中島副学長の挨拶の後、卒業生等のスピーチ、学生のパフォーマンス、ペラデニア大学副学長の挨拶が行われ、最後に在スリランカ日本国大使館の岡井公使の祝辞があり、両国関係強化のために大学間の交流促進が重要であり、本学の取組に関する期待が述べられた。中島副学長からペラデニア大学副学長に記念品贈呈が行われた。



ホームカミングデーの記念写真

ペラデニア大学副学長に記念品を贈呈する
中島晃副学長

2.2 佐賀大学フェア in ペラデニア大学

【日時】平成27年3月9日（月）

【会場】ペラデニア大学講堂

【概要】

本学への留学を促進することを目的として、ペラデニア大学の一般学生を対象として、佐賀大学を紹介する佐賀大学フェアを実施した。中島副学長の挨拶に続き、高橋教授による大学紹介及び大和教授による工学系大学院のプログラム紹介を行い、あわせて佐賀県庁からの佐賀県の紹介を実施した。想定を大幅に上回るペラデニア大学の学生152人が参加し、熱心に説明を聴講した。参加した学生の他には終了後も直接大和教授等に大学院進学について詳しく質問するものもあり、その関心の高さがうかがわれた。



佐賀大学フェアに参加した学生たち



学生による伝統舞踊パフォーマンス

【日時】平成27年3月10日（火）午後

【会場】ペラデニア大学講義室

【概要】

本学への留学を促進する目的として、ペラデニア大学の理系学生を対象として、佐賀大学を紹介する佐賀大学フェアを実施した。中島副学長の挨拶に続き、高橋教授による大学紹介及び大和教授による工学系大学院のプログラム紹介を行い、佐賀県庁からの佐賀県の紹介を実施した。ペラデニア大学の理系学生27人が参加し、熱心に説明を聴講した。

2.3 佐賀大学フェア in モラトゥワ大学

【日時】平成27年3月11日（水）

【会場】モラトゥワ大学講義室

【概要】

モラトゥワ大学の工学系学生を対象として、同様に佐賀大学の紹介を行った。時間の都合上、高橋教授の佐賀大学の紹介及び大和教授の工学系プログラムの紹介を行った後、質疑応答を行った。工学系学生30人が出席し、熱心に説明を聴講した。



3. 国際交流セミナーの開催

高等教育のグローバル化の中、多くの大学で交換留学生に対する英語での授業提供や日本人学生に対する英語を教授言語とする授業が行われている。しかし、英語による授業提供には、目的や方針に合った科目の整備や体制の構築、受講生の英語力、海外からの学生ニーズとのマッチング等様々な課題がある。今回、名古屋大学と茨城大学から講師を招き、交換留学生受け入れプログラムの観点から各大学の事例より学ぶとともに、佐賀大学の状況も含め、課題の共有、それに対する工夫や取り組みについて意見交換を行った。

「英語による授業と留学生受け入れプログラムの発展に向けて」

【日時】平成26年12月5日（金） 14:40～17:30

【場所】佐賀大学附属図書館会議室

【プログラム】

「交換留学受け入れプログラム（NUPACE）と日本人学生の英語力の課題」

野水 勉氏（名古屋大学国際教育交流センター・教育交流部門）

「地方大学における国際化の取り組みと課題」

池田庸子氏（茨城大学留学センター）

「佐賀大学での短期留学プログラムの取り組み－専門科目と教養教育における異文化理解への試み－」

古賀弘毅・丹羽順子（佐賀大学全学教育機構）

村松和弘（佐賀大学大学院工学系研究科）

全体討論

4. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学の帰国留学生等を佐賀大学友好特使として委嘱し、友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生交流および国際学術交流を図ることにより、本学の国際化を推進することを目指している。本年度は新たに、1人の方に佐賀大学友好特使を委嘱した。北村氏は佐賀県出身で平成25年2月に開始された香港中文大学との双方向型学生交流プログラムの立ち上げに尽力いただいた。毎年2月に本学学生が香港中文大学で研修に参加する際に、講義や意見交換等の機会を提供していただいている。

国名	名前	所属・職名	活動
日本	北村 隆則	香港中文大学教授 元香港総領事・元ギリシャ大使	香港中文大学プログラム キーパーソン

5. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動

平成21年9月にハノイ国家大学外国語大学内に設置したサテライトオフィスは5年目を迎えた。多くの日本の大学や政府機関関係者が立ち寄り、情報収集の場として活用されている。本学でのオフィス利用については、文化教育学部のツイニング・プログラムや本学の交換留学に関わる情報の発信、応募学生への支援等が中心であり、十分に活用されているとは言えない。サテライトオフィスを通じてベトナム国内の大学への通信業務なども行なっているものの、単科大学という性格から文化教育学部以外の学部関係者が本オフィスを基点として研究教育活動を行なうことはあまりなかった。オフィスの活用方法と運営方法について、再度、検討・分析する必要がある。

Ⅱ. 学生交流部門

1. 留学生受け入れ

1.1 留学生受け入れ概況

平成22年から平成26年までの過去5年間の留学生数（学位取得を目的とする留学生、交換留学生、研究生）の推移を以下に示す。平成22年の302人が平成26年には233人と2割強の減少をみた。国籍別の動向を見ると、中国人学生（53人減）とインドネシア人学生（16人減）が著しく減少している。中国人留学生については、日本全体の中国人学生数が平成22年から平成26年の間に1.4万人減少しており、本学も同様の傾向を示していると言える。インドネシア人留学生の減少は平成25年度からインドネシア政府（DIKTI）奨学金の受給対象大学から外れたことにより、政府奨学金を受給して本学に留学することができなくなったことに起因する。一方、増加を示しているのはタイおよび台湾である。これらの学生は協定校から半年ないしは1年間派遣される交換留学生がほとんどである。

次に学生の在籍身分別で推移を見ると、減少しているのは学位取得をめざした正規留学生および研究生であることがわかる。太枠で囲っている留学生数は学術交流協定に基づいて受け入れをした学生で、交換留学生の数は50人から60人の間で推移している。

以上のように、本学に学位取得を目指して留学をする学生の数が減っている一つの要因としては、国費留学生枠が減少していることが挙げられるが、各学部・研究科の共同研究等で築いた連携関係や本学で学位を取得し帰国した同窓生とのネットワーク拡大と情報共有、ホームページやSNS等による効果的な大学広報等を行なう必要がある。

【表1】平成22年～26年 国籍別留学生数の推移

(毎年5月1日現在)

		H22年	H23年	H24年	H25年	H26年
アジア	中国	162	161	145	136	109
	インドネシア	33	33	28	22	17
	大韓民国	27	21	19	16	16
	バングラデシュ	19	15	13	11	7
	ベトナム	14	14	18	14	13
	マレーシア	10	13	20	24	21
	スリランカ	9	10	9	7	8
	ネパール	8	7	5	2	2
	台湾	7	11	9	8	14
	タイ	5	5	6	11	10
	モンゴル	1	1	1	1	1
	パキスタン	1	1	0	0	0
	カンボジア	0	0	1	1	4
ラオス	0	1	1	0	1	

アジア	イラン	0	1	1	1	1
アフリカ	ケニア	1	0	0	0	0
	ウガンダ	1	1	1	1	0
	エジプト	0	0	0	1	1
オセアニア	オーストラリア	0	0	0	0	1
ヨーロッパ	フランス	2	0	1	2	2
	ポーランド	1	1	1	0	0
	ベルギー	0	0	0	0	1
	スウェーデン	0	0	0	0	1
	リトアニア	0	0	0	1	0
	アルメニア	0	0	0	0	1
北米	カナダ	1	0	0	0	0
	アメリカ	0	1	0	2	2
計		302	297	279	261	233

【表2】平成22年～26年 在籍身分別留学生数の推移 (毎年5月1日現在)

	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年
正規生（学位取得）	205	200	195	187	160
研究生	20	22	13	7	4
特別研究学生（交換）	2	1	2	3	2
特別聴講学生（交換）	33	31	30	25	0
短プロ SPACE（交換）	20	18	16	24	57
科目等履修生	1	3	0	0	0
連合大学院	20	22	22	14	7
日本語・日本文化 研修コース	1	0	1	1	3
計	302	297	279	261	233

平成25年10月より日本語で専門科目を履修する交換留学生のための短期留学プログラム（SPACE-J）が開始となり、平成26年度特別聴講学生（交換）に分類されていた留学生は短期留学プログラムに加えられている。

1.2 佐賀大学短期交換留学プログラム (SPACE-E および J)

1.2.1 SPACE-E 実施報告

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授 (全学教育機構) 丹羽 順子 准教授 (全学教育機構)

1. 平成26年度春学期 (平成26年4月～9月)

■実施概要

平成25年10月に入学した第13期の学生23人が、2学期目も続けて科目を学修した。また、4月入学の学生7人を受け入れた。これらの計30人の学生の出身国別の人数は、中国4人、台湾8人、韓国1人、ベトナム1人、ラオス1人、フランス2人、アメリカ1人、タイ4人、インドネシア4人、カナダ1人、バングラデシュ1人、スリランカ2人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部13人、経済学部4人、理工学部5人、農学部8人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修B」、6単位以上の選択必須の「日本語」と異文化交流インターフェイス科目、およびそして各学部が提供している「専門選択科目 (英語による講義)」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成26年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)
Ⅱ	日本に関するWEB ページ制作応用(文)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全)	バイオ関連化学(農)	Outdoor Education(文)	文化と化学(文)
Ⅲ					
Ⅳ		言語学における野外 手法(全)	日本事情研修B(全)		
V		理工学紹介B(理)	概説・農学と環境学(農)		

(全) : 全学教育機構 (農) : 農学部 (理) : 理工学部 (文) : 文化教育学部

「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル1 (日本語総合Ⅰ) からレベル6 (上級) までであるが、表1には日本語総合Ⅰから総合Ⅲまでをのせている。

春学期の視察・見学等

H26年	4月	日本事情研修（福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮）
	6月	日本文化研修（茶道研修）
	6月	日本事情研修（キューピー鳥栖工場、キリンビール工場）

春学期入学者（5ヵ国・地域 6大学 7人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	私費	北京工業大学	1年
2		女	私費	浙江理工大学	1年
3		女	私費		1年
4	台湾	女	私費	元培科技大学	1年
5	韓国	女	私費	釜慶大学校	1年
6	タイ	男	JASSO	モンクット王ラカバン工科大学	1年
7	インドネシア	男	JASSO	遼寧師範大学	1年

2. 平成26年度秋学期（平成26年10月～平成27年3月）

■実施概要

平成26年10月に新たに第14期の学生17人が入学した。4月に入学した学生7人のうち4人は8月に帰国したが、残った3人と合わせて20人が秋学期の科目を学修した。出身国別の人数は、中国5人、台湾6人、韓国1人、フランス1人、アメリカ1人、インドネシア1人、タイ1人、バングラデシュ1人、フィンランド2人、リトアニア1人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部12人、経済学部1人、理工学部4人、農学部3人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修A」及び各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」、さらに必要に応じて「日本語」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生および、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成26年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)
II	開発経済学特論(経)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全)	アカデミック ライティング(全)		理工学紹介(理)
III	日本に関するWEB ページ制作入門(文)			我が国の環境保全の 最新情報(文)	

IV	日本・東南アジア関係論(文)		日本事情研修A(全)		
V			概説・応用生物学(農)		

(全) : 全学教育機構 (経) : 経済学 (農) : 農学部 (理) : 理工学部 (文) : 文化教育学部

秋学期の視察・見学等

H26年 10月	日本事情研修 (熊本城、水前寺公園)
12月	日本事情研修 (国際交流 in 吉野ヶ里)
H27年 1月	日本事情研修 (羊羹資料館、酒造見学)

SPACE-E 秋学期入学者 (9ヵ国・地域 12大学 17人)

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	台湾	女	交流協会	国立台北大学	1年
2		女	私費		1年
3		女	私費	国立東華大学	1年
4		女	私費		1年
5		女	私費	国立中興大学	1年
6	中国	女	私費	浙江科技大学	半年
7		男	私費		半年
8		男	私費		半年
9		女	私費	浙江理工大学	半年
10	フィンランド	男	JASSO	ユバスキュラ大学	1年
11		男	私費		1年
12	リトアニア	女	JASSO	ヴァイタウタス・マグヌス大学	1年
13	フランス	女	私費	オルレアン大学	1年
14	アメリカ	男	私費	スリッパリーロック大学	1年
15	韓国	男	私費	国民大学校	半年
16	タイ	男	JASSO	モンクット王ラカバン工科大学	1年
17	バングラデシュ	男	JASSO	チッタゴン工科大学	1年

平成26年度 自主研究の履修状況

理工学部と農学部における「自主研究」の必須科目化と選択科目の追加についてだが、本年度、理工学部と農学部に属するすべての学生が「自主研究」を履修した。

学部内訳	H26年4月～8月	H26年10月～H27年3月
理工学部	5人	4人
農学部	8人	3人

自主研究テーマ（平成26年4月～8月）

理工学部	磁界解析を用いた電気機器の改良
	近隣公園に対する外部空間ランドスケープ計画の適用
	ビジョンシステムを有する移動ロボットの制作と制御
	アコースティックエミッションの源位置解析についての研究
農学部	界面活性剤－高分子相互作用の熱力的研究
	温州みかんの葉におけるアレル特異的及び台木由来転写物の検出
	発酵食品のスフィンゴ脂質の解析
	Solanum gilo の細胞質を用いたナス雄性不稔系統の育成
	日本における野菜および果樹の流通の新動向に関する研究
	日本におけるエコツーリズムのケーススタディー
	農産物直売所の経営者によるマーケティング戦略
	乾海苔に含まれる糖質および脂質に関する研究
大豆の栄養機能に関する研究	

自主研究テーマ（平成26年10月～平成27年3月）

理工学部	生体信号を用いた移動ロボットの制御に関する研究
	水熱法による単結晶成長
	X線回析を用いた結晶構造解析
	ナノ粒子の合成と評価
農学部	インドネシア農村の市場チャンネルにおいて知識農民を増やす情報通信技術の普及
	大豆の京葉成分に関する研究
	汚染のない廃棄物処理

平成26年度インターフェイスプログラム「異文化交流」科目の履修

SPACE-Eの学生（およびSPACE-Jの学生）が、全学教育機構が提供するインターフェイスプログラムの『異文化交流』3つの科目を履修し、日本人学生と留学生と一緒に学んだ。これらの科目では、留学生と日本人学生が交流できるように、異文化交流を様々な形で体験している教員が、授業に工夫を凝らしている。留学生と日本人学生は、英語でのキャンプ、英語での4コマ漫画執筆、キリスト教、イスラム教、仏教文化圏出身の学生と日本人の学生が、廃校となった小学校でキャンプ（食事作りを含む）を通して、異文化交流（衝突も含め）ができた。

春学期

・異文化交流 II “Outdoor Education in English” 木曜日 2校時

秋学期

・異文化交流 I “Sequential Drawing in English” 木曜日 2校時

・異文化交流 II 「異文化衝突の作法」 水曜日 2校時



春学期 修了式



大名行列に参加する留学生たち

1.2.2 SPACE-J 実施報告

■コース概要

SPACE-Jは佐賀大学の協定校に所属する学生を対象としたプログラムである。日本語能力検定（JLPT）N2相当以上の日本語能力を有することが参加の前提である。日本語や日本社会について学べるほか、個々の学生の専攻に応じた授業を日本語で履修できるカリキュラムを提供している。SPACE-Jには、レギュラーコースとブリッジコースの2種類が設けられている。来日当初のプレースメントテストの結果、日本語能力が初中級・中級レベルと判定された学生は、ブリッジコースに参加し、日本語を優先的に学修する。1学期終了後には十分な日本語能力を獲得していれば、レギュラーコースに移ることができる。それぞれのコースの履修科目は以下のとおりである。学生は必修科目である「日本事情研修C/D」を含め、1学期あたり最低12単位を修得することが求められる。条件を満たした学生には、終了時に佐賀大学から修了証が授与される

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（全学教育機構） 中山 亜紀子 准教授（全学教育機構）

SPACE-J の履修科目

SPACE-J	レギュラーコース		日本事情研修	必修 2 単位	1 学期あたり 12 単位以上
			専門科目等	選択	
			日本語科目	選択	
	ブリッジコース	中級	日本事情研修	必修 2 単位	
			日本語科目	6 単位以上	
			専門科目等	最大 4 単位	
初中級	日本事情研修	必修 2 単位			
	日本語科目	10 単位以上			

■実施概要

平成26年度のSPACE-Jプログラムの参加者数は44人（うち、ブリッジコース7人）であった。ブリッジコース参加者は、全員が一学期目の終了後に試験を経てレギュラーコースへの移行を認められ、各自の専門分野を学修した。SPACE-Jの学生全員が履修する『日本事情研修』では、学期ごとにテーマを設けて、体験型の学習を行った。また、授業の一環として、学外見学などの行事を実施した。春学期、秋学期それぞれの入学者および日本事情研修の詳細は以下のとおりである。

■日本事情研修

春学期の日本事業研修Dは「スポーツ」をテーマとして、小学校の運動会や中学校の部活を見学したり、サッカーのワールドカップについての報道を分析するなどの活動を通じて、日本におけるスポーツと、自国におけるスポーツの位置づけについて理解を深めた。その他、学外研修として、伊万里・大河内山を訪問し、陶磁器や歴史について学んだ。秋学期の日本事情研修Cでは、日本人の生活や文化・行動を知るために、グループごとにテーマを決め、観察を行い、中間報告、最終報告を行った。最終報告は、聴衆として、学外の日本人のビジターを招いて行い、学習の成果を披露した。また、学外研修としては、鹿島市を訪問し、肥前浜、祐徳稲荷神社、酒蔵見学を行い、佐賀及びその文化についての知識を深めた。

平成26年度春学期の視察・見学等

H26年 7月	日本事情研修（窯元めぐり 伊万里市、大河内山）
---------	-------------------------

春学期入学者（4ヵ国・地域 10大学 17人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	私費	浙江理工大学	半年
2		女	私費		半年
3		女	JASSO	遼寧師範大学	1 年
4		女	JASSO		1 年
5		女	JASSO	北京工業大学	1 年
6		女	JASSO		1 年
7		女	JASSO	浙江大学城市学院	1 年

8	韓国	女	JASSO	大邱大学校	1年
9		男	私費		1年
10		女	私費		1年
11		女	JASSO	国民大学校	1年
12		男	JASSO		1年
13		女	私費	培材大学校	1年
14	台湾	女	私費	文藻外語大学	半年
15		女	私費		半年
16		男	JASSO	輔仁カトリック大学	1年
17	オーストラリア	女	佐賀大学奨励費	シドニー工科大学	1年

平成26年度秋学期の視察・見学等

H26年 11月	日本事情研修（酒蔵視察・干潟展望館・祐徳稲荷神社参拝 鹿島市）
----------	---------------------------------

秋学期入学者（5ヵ国・地域 10大学 12人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	JASSO	浙江理工大学	1年
2		女	JASSO		1年
3		女	JASSO	華東師範大学	1年
4		女	JASSO	浙江大学城市学院	1年
5		男	JASSO		1年
6		女	JASSO	西南政法大学	1年
7	台湾	女	JASSO	国立政治大学	1年
8		女	JASSO	輔仁カトリック大学	1年
9	韓国	女	JASSO	済州大学校	1年
10		女	JASSO	国民大学	1年
11	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学外国語大学	1年
12	タイ	女	JASSO	カセサート大学	1年

1.3 平成26年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が自らの日本語能力を伸ばすだけではなく、日本人学生と共修することによって、広く日本文化や地域のことを学べるコースとなっている。具体的には、全学教育機構が提供する「外国人プログラムのための日本語科目」や日本人学生との共修科目である「インターフェイス異文化理解」、また自分の興味に応じた授業を、佐賀大学の各学部提供科目のなかから選んで履修することができる。これは平成25年度の改革によるもので、これにより、幅広い専門をもった学生が、自分の興味関心に応じた科目を履修することができるようになった。

平成25年度は、24年度後期から在籍していたストックホルム大学(スウェーデン)、リール第3大学(ベルギー)、ロシア-アルメニア大学(アルメニア)各1人ずつ、合計3人の研修生が佐賀大学で学んだ。彼らは古い細則が適用されたため、3人中1人しか修了することができなかった。しかし、それぞれ自分の目的に応じた研修を行うことができ、満足して離日した。平成25年度後期からは、ハノイ国家大学(ベトナム)1人、ティラク大学(インド)1人、計2人の大使館推薦の学生を受け入れた。受け入れ部局は文化教育学部である。現在は、日本語の能力を伸ばしつつ、日本人学生との共修授業に参加するなど、積極的に学内で交流を行い、日本社会への理解を深めている。また、SPACE-Jの日本事情研修を履修し、研修旅行等にも他の特別聴講学生と一緒に参加している。来年度前期には、それぞれの専門や来日の目的に応じた授業選択を行い、より大きい成果を上げてくれることを期待している。

■コーディネーター

中山 亜紀子 准教授(全学教育機構)

■開講期間

平成25年10月～平成26年8月

平成26年10月～平成27年8月

■実施概要

平成25年度日本語・日本文化研修コース受講生(平成25年10月～平成26年9月)

国名	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
スウェーデン	男	国費	ストックホルム大学	1年
ベルギー	女	国費	リール第三大学	1年
アルメニア	女	国費	アルメニア大学	1年

平成26年度日本語・日本文化研修コース受講生(平成26年10月～平成27年8月)

国名	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
ベトナム	女	国費	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	1年
インド	女	国費	ティラク大学	1年



平成25年度受講生の修了式



平成26年度入学式

1.4 平成26年度日本語研修コース

■コース概要

外国人留学生の大学院入学前予備教育として、日本語研修コースを開設している。主に国費外国人留学生のためのコースであるが、私費留学生についても参加を認めている。日本語初級前半・初級後半・初中級までの3レベルを設定し、参加学生はプレースメントテストによってどのレベルに該当するか判断される。各レベル、1週間に9～10コマの日本語授業が開講され、研修コース参加者は原則当該レベルの全ての日本語授業を受講して、全ての授業科目を修了すればコース修了となる。平成26年度前学期は参加者がなかったが、後学期は15人が参加した。

■コーディネーター

吉川 達 講師（全学教育機構）

■日本語研修コース参加学生

平成26年度春学期（平成26年4月～平成26年8月）

参加学生なし

平成26年度秋学期参加者（平成26年10月～平成27年2月）

国名	性別	所属研究科	区分	レベル
バングラデシュ	男	教育学研究科	国費	初級前半レベル
	男	工学系研究科	国費	初級前半レベル
	男		国費	初級前半レベル
	女		国費	初級前半レベル
	男		農学研究科	国費
	女	国費		初級前半レベル
	女	国費		初級前半レベル
	女	国費		初級前半レベル

タイ	男	経済学研究科	国費	初級前半レベル
	女		国費	初級前半レベル
中国	女		私費	初中級レベル
ケニヤ	男	工学系研究科	ABE イニシアティブ	初級前半レベル
モザンビーク	男		ABE イニシアティブ	初級前半レベル
ベトナム	女	農学研究科	国費	初級後半レベル
エジプト	男		国費	初級前半レベル

1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2014

■概要と成果

7月1日から7月18日の約3週間、6ヵ国、8大学から19人の学生を迎えて佐賀大学サマープログラム2014を実施した。このプログラムのテーマは“Creating Innovation for Sustainability in Young Leaders”でこのサマープログラムに参加した学生はテーマに沿った学習・見学・体験等を行った。プログラムには佐賀大学での講義のほかに佐賀市エコプラザ見学や廃棄物収集車体験、ホームステイ、唐津市での環境保全活動等が組み込まれ、佐賀の魅力を体験や交流を通じて実感できる研修内容となった。また、過疎化が進む農村地帯の実態と農業の持続性について学ぶため三瀬村で農村体験も行った。修了式では大和武彦国際交流推進センター副センター長から、参加した学生一人ひとりに修了証書が手渡され、充実した3週間のプログラムが修了した。このプログラムの一部には佐賀大学生も参加し、サマープログラムの参加者と相互に交流を深める有意義な機会となった。

■コーディネーター

高橋 彩 教授（国際交流推進センター）

■学内協力教員

岡島教授（文化教育学部）、北垣准教授（農学部）、徳田准教授（農学部）、松本講師（アグリ創生教育研究センター）、大和教授（工学系研究科）、ウォンタナスントン・ナルモン准教授、三島講師（工学系研究科）、吉川講師（全学教育機構）、浅岡講師（非常勤 全学教育機構）

■学外協力機関・協力者

佐賀市エコプラザ、佐賀市廃棄物最終処分場、佐賀市三瀬村鳴瀬川4集落自治会、佐賀県波戸岬少年自然の家、さが水ものがたり館、株式会社佐賀資源化センター、王子マテリア株式会社佐賀工場、道の駅鹿島、チャリさがさいせい、NPO 法人唐津環境防災推進機構、江頭利将氏（セイカン総合エンジニアリング、佐賀大学友好特使）

■実施期間

平成26年7月1日～18日（18日間）

■参加学生（5カ国19人の留学生及び佐賀大学生10人）

地域	国名	大学名	参加人数
北米	アメリカ	スリッパリーロック大学	1
オセアニア	オーストラリア	シドニー工科大学	2
		ラトローブ	1
アジア	タイ	コンケン大学	8
		カセサート大学	3
		チェンマイ大学	1
	スリランカ	ペラデニア大学	1
	カンボジア	王立プノンペン法経大学	2

■スケジュール

		7月1日(火)	7月2日(水)	7月3日(木)	7月4日(金)	7月5日(土)	7月6日(日)
Week I エネルギーと環境	午前	10:00-開講式 10:30-11:30 オリエンテーション	9:00-10:30 ホームステイのためのサ バイバル日本語	9:00-12:00 ゴミ収集者体験 & エコプラザ訪問	9:00-12:00 ゴミ収集者体験 & エコプラザ訪問	ホームステイ	ホームステイ
	午後	11:30- 佐賀大と昼食	10:30-12:00 環境と資源リサイクル	13:00-14:30 資源化センター 最終処分場 視察	13:30-14:30 王子マテリア 訪問		
Week II 農・食・コミュニティ	午前	7月7日(月) 9:00-10:20 「持続性のある省エネ・ 環境改善を推進するには？」 佐賀大学友好特使 江頭 俊将氏	7月8日(火) 自由	7月9日(水) 台風により キャンセル	7月10日(木) 台風により キャンセル	7月11日(金) 10:30-12:00 「生物多様性」	7月12日(土) 10:00-11:30 「虹の松原再生・ 保全活動」
	午後	自由	14:40-16:10 「日本の食文化と酵母」	自由	台風により キャンセル	14:40-16:10 「山間部の暮らし」	12:00-13:30 虹ノ松原 自然保護活動
Week III 持続可能な社会	午前	7月14日(月)	7月15日(火) 10:30-12:00 アグリ創生教育 研究センター見学 「循環型農業について」 野菜収穫体験	7月16日(水) 10:30-11:30 「水ものがたり館」見学	7月17日(木) 振り返り・ グループワーク	7月18日(金) 9:30-11:00 グループ プレゼンテーション	帰国
	昼食	鹿島市	各自	大和町	各自	11:00-12:00 終了式+Farewell Party	
	午後	13:00-13:30 「有明海の生き物」 13:30-15:30 ミニガタリンピック	13:00-14:30 「化学産業と地球環境」	台風により キャンセル	13:00-17:00 振り返り・ グループワーク	自由	



収穫体験



振り返りの様子



修了式の集合写真

1.6 香港中文大学学生交流プログラム (短期受入れ)

■プログラム

7月8日から15日の8日間、香港中文大学の日本研究専攻学生10人を迎えて「佐賀大学・香港中文大学サマープログラム2014」を実施した。このプログラムは、学生10人が香港中文大学を訪問し、講義や交流、視察を通じて交流を行った。今回は香港で親交を深めた香港中文大学生10人を2月に派遣された佐賀大学生が迎える形となった。今回のプログラムは“Creating Innovation for Sustainability in Young Leaders”というテーマのもとで実施され、佐賀大学での講義のほか、佐賀市の中学校訪問、唐津での松原保全活動、三瀬での農業体験等が組み込まれ、佐賀の魅力を体験や交流を通じて実感できる研修内容となった。修了式では中島副学長（国際交流推進センター長）から、参加した一人ひとりに修了証が手渡され、8日間のプログラムは修了した。この受入れプログラムに参加した佐賀大学生10人も、香港中文大学生との交流を通して更なる相互理解や親交を深めた。



プログラム修了式にて



初めての干潟体験

■コーディネーター

吉川 達 講師（全学教育機構）

■実施期間

平成26年7月8日～15日（8日間）

■参加人数

香港中文大学生10人、佐賀大学生10人

■スケジュール

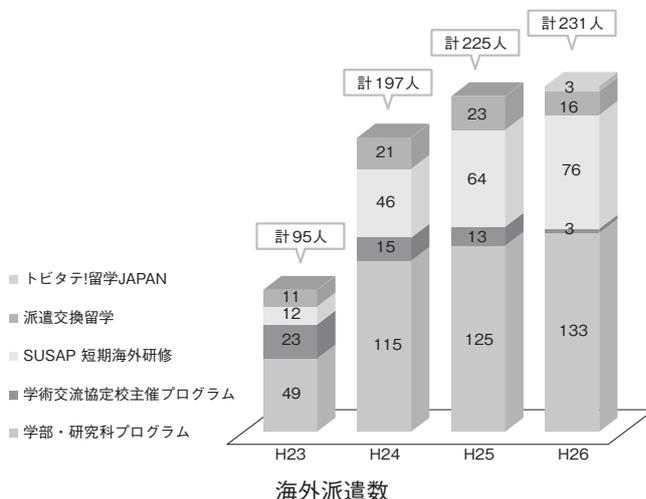
	1 7月7日(月)	2 7月8日(火)	3 7月9日(水)	4 7月10日(木)	5 7月11日(金)	6 7月12日(土)	7 7月13日(日)	8 7月14日(月)	9 7月15日(火)	10 7月16日(水)
午前		開講式	10:30-12:00 授業見学 インターフェイス 異文化交流	10:00-12:30 鹿島干潟 干潟の生物と環境 ミニガタリンピック	10:30-12:00 農学部徳田先生 レクチャー 「生物の多様性」	唐津・虹の松原 KANNNEとの 連携による「虹 の松原再生・保 全活動と環境 NPOの運営に 関する学習」			10:30-12:00 自主課題調査の発表 12:00-13:00 修了式	
午後	来日	13:00 図書館前集合 13:50-15:45 松梅中学校訪問 16:30 大学着 18:00-20:00 歓迎会	小城市見学 13:00-17:00 13:40- 友樹飲料訪問 14:30 羊羹資料館見学 須賀神社参拝 15:30 清水の滝	14:00-15:00 祐徳稲荷神社見学	14:40-16:10 集落支援員堀氏 レクチャー 「佐賀の農村の 現状と課題」 18:00-20:00 学生交流会	10:00-11:30 レクチャー 11:30-12:00 昼食 12:00-13:30 解説付き散策後、 保全活動（松葉 かき、草ぬき） 14:00-15:00 唐津城 16:00 波戸岬 少年自然の家	10:00- 日本の農村社会 と農業体験「持 続可能な農業を 考える」@三瀬 中鶴地区・出野 地区	自主課題調査 佐賀市散策 18:30- 送別会	帰国	

2. 学生の海外派遣

2.1 本学学生の海外派遣概況

平成23年10月に国際交流推進センターが設置された後、海外派遣制度や奨学金の整備、短期プログラムの拡充、学生への海外留学情報の発信方法の改善など行ってきた。大学全体の派遣数は平成24年度に大幅な増加となった後、平成25年度、26年度は微増となった。平成26年度は学部・研究科が実施する派遣プログラムを通して海外に派遣された学生が133人、協定校が実施するサマープログラム等に参加した学生が3人、国際交流推進センターが実施する短期派遣プログラム（SUSAP）に参加した学生が76人、半年または1年間の交換留学に参加した学生が16人、トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムを通して派遣された学生3人で派遣総数は231人となった。

前年度と比較すると、派遣交換留学と学術交流協定校プログラムへの参加が減少している。協定校プログラムへの参加が減った理由として、協定校が実施する短期のプログラムを国際交流推進センターがSUSAPの一部としてプログラム化したことによる。協定校と協議を行い、派遣と受け入れのインバランスを加味して佐賀大学生の授業料免除による受け入れ枠を増やしてもうとともに、本学のプログラムとすることで留学手続き、事前研修・事後研修など十分な教育と支援を行なうことが可能となった。SUSAPの派遣人数がH25年の64人から平成26年の76人に増加したのはこれに起因するものである。



2.2 交換留学生の派遣

平成26年度は11カ国・地域の14大学に16人の本学学生を派遣した。派遣数は前年度から7人減少した。アジアへの派遣数は昨年度と変わらないため、英語圏への留学が減少したことになる。新しい傾向として、それまで学部4年生で交換留学に参加するものが多かったが、今年度の学生の半数以上が学部2年生と3年生が占めており、4年間で卒業することや、就職活動などを考えて留学開始時期を早める傾向が見られる。学部4年生の就職活動開始までに帰国するためには、遅くとも学部2年生の2月に出発しなければならないため非常に難しい。就職活動や卒業が遅れることへの懸念が本学学生の海外留学にブレーキをかけているのではないと思われる。

平成26年度に派遣された学生の奨学金受給率は昨年につき100%となった。アジアの協定校に派遣される学生のための「アジアで活躍できるリーダー養成プログラム」が本年も採択となり、7人が月額6万円または7万円を受給した。また平成25年度より開始した「佐賀大学学生海外派遣奨励費」を5人の学生が受給した（半年15万円、1年間30万円）。その他の派遣学生も研究科の派遣支援制度による奨学金、後援会、校友会による支援を受けた。

■平成26年度に本学から派遣された交換学生（11カ国・地域 14大学 16人）

派遣国	派遣先大学	氏名	所属	派遣時 学年	派遣期間	奨学金
アメリカ	スリッパリーロック大学	岡部 有紗	文化教育学部	3	平成26年8月～ 平成27年5月	佐賀大学奨励費
		五十嵐梨紗	文化教育学部	4	平成26年8月～ 平成27年5月	後援会 校友会
	パシフィック大学	山本 智之	文化教育学部	3	平成26年8月～ 平成27年5月	後援会 校友会
カナダ	ウィルフリッドロリエ大学	高上穂奈美	工学系研究科	M1	平成26年10月～ 平成27年3月	佐賀大学奨励費
フランス	ブルゴーニュ大学	中村 有沙	文化教育学部	3	平成26年9月～ 平成27年6月	佐賀大学奨励費
フィンランド	ユバスキュラ大学	田中 佑実	文化教育学部	4	平成26年8月～ 平成27年5月	佐賀大学奨励費
リトアニア	ヴィタウタス・マグヌス大学	姜 珍実	経済学部	2	平成27年2月～ 平成27年12月	佐賀大学奨励費
オーストラリア	シドニー工科大学	野瀬 共映	経済学部	4	平成26年7月～ 平成26年11月	後援会 校友会
中国	浙江理工大学	岩崎 紘子	文化教育学部	2	平成27年2月～ 平成28年1月	JASSO
韓国	大邱大学校	御手洗さつき	経済学部	3	平成26年6月～ 平成26年12月	JASSO
	国民大学校	熊谷 拓郎	文化教育学部	3	平成27年3月～ 平成27年	JASSO
台湾	国立政治大学	片山 咲	経済学部	2	平成27年2月～ 平成28年1月	JASSO
		野中 啓示	経済学部	2	平成27年2月～ 平成28年1月	JASSO
タイ	カセサート大学	松田 正弘	経済学部	4	平成26年8月～ 平成27年5月	JASSO
	タマサート大学	岡本 風音	経済学部	2	平成27年2月～ 平成27年12月	JASSO
スリランカ	ペラデニア大学	野中 颯介	文化教育学部	3	平成26年8月～ 平成27年7月	後援会 校友会

2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は平成26年度に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度で、希望学生は大学を通じて申請することになっている。プログラムの特徴はインターンシップやボランティア、フィールドワークなど多様な活動を支援し、学生自らがその留学プランを設計することができる柔軟性がある点である。平成26年度に立ち上がったこのプログラムの第一期に、本学の学生6人が応募し、3人が採択された。語学の能力や学業成績などは条件に含まれず、海外での活動内容も自ら計画することができるということで、学生にとっては応募しやすいように感じられるものの、実際は自らの問題意識や関心を引き出しながら、ユニークな計画を創り上げるのは難しいようである。第一期生に選ばれた3人はいずれも留学は自己実現のみならず、社会へ還元しようという意気込みがある内容であった。

名前	学部・研究科	専攻	学年	派遣先国	活動内容	派遣枠
池田 千代	工学系研究科	都市工学専攻	M2	インドネシア	熱環境調査、 ライフスタイル調査	自然科学系、複合・ 融合系人材コース
佐々木 彰	医学部	医学科	2	ケニア・インド	医療機関での インターンシップ	
山口 諒真	経済学部	経済学科	2	ミャンマー	NPO 法人での インターンシップ	新興国コース

2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

平成26年度は8つのプログラムを実施した。平成24年度以降、学生の多様なニーズに適うプログラムの立ち上げ、拡充を協定校の協力を得ながら行なった。これまで英語を集中的に学ぶ欧米への派遣プログラムが多かったが、現地の若者や一般市民とより密な交流を行い、異文化に触れながら、派遣先国の社会、経済、文化を多様な経験を通して学ぶものへと転換してきた。これらは海外協定校等による協力や連携により可能となった。また派遣先地域も英語圏が主であったが、アジアへの派遣を促進するためのプログラムを実施した。

■ H24年度～26年度 SUSAP 実施状況

	H24年度	H25年度	H26年度
	夏2／春3	夏1／春5	夏4／春4
現地社会・文化の 理解、学生交流 (佐賀大生のみを 対象)	香港中文大学 (春) 中国	香港中文大学 (春) 中国	香港中文大学 (春) 中国
			浙江大学城市学院 (春) 中国 イマージョンプログラム(夏) シンガポール
英語力向上を目的 とする研修	パシフィック大学 (夏) 米国	パシフィック大学 (夏) 米国	
	シドニー工科大学 (夏) オーストラリア		
	モナシュ大学 (春) オーストラリア	モナシュ大学 (春) オーストラリア	
	オークランド大学 (春) ニュージーランド	オークランド大学 (春) ニュージーランド	オークランド大学 (春) ニュージーランド
			カーティン大学 (夏・春) シンガポール
言語・文化体験・ 交流、多様な国の 出身者との共修		大邱大学校 (春) 韓国	大邱大学校 (夏) 韓国
		浙江理工大学 (春) 中国	
			浙江科技学院 (夏) 中国

2.4.1 浙江科技学院プログラム

■概要

浙江科技学院が毎年ドイツの協定校の学生を主な対象として実施しているサマープログラムに、本学の学生を授業料不徴収で受け入れてもらった。本プログラムは午前中に中国語の授業、午後は中国文化、社会、歴史に関連する体験や視察などに参加した。週末は日帰りで上海を訪れる学生もおり、風光明媚な世界遺産の街として知られる杭州と経済発展の著しい金融・経済の中心である上海の二つの地域の今を体験することができた。学生は本プログラムで提供される活動以外に、日本出発前に自ら設定した自主課題研究にも取り組んだ。中国の農業と食や中国漢方、中国の病院事情など学生個々の専門に応じたテーマを設定し、現地では自主的に様々な機関を訪問し情報収集をすることで様々な知見を得た。

【単位付与】なし

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成26年 8月7日～24日（18日間）

■参加学生 6人

名 前	所属学部・研究科	学 年
高松 優光	医学部	5
酒井慎太郎	医学部	4
鹿毛 理佐	経済学部	3
山下 雄大	理工学部	2
長澤 智隆	農学部	1
平野 耕作	農学部	1

2.4.2 大邱大学校プログラム

■概要

平成25年の春より大邱大学校への学生の短期派遣を開始した。大邱大学校が協定校の学生を対象としている実施しているサマープログラムに本学学生を派遣した。本学学生は、日本人以外の学生と日々共に学習し、活動をする機会に恵まれた。午前は韓国語の授業を受講し、午後は伝統文化体験、韓国映画鑑賞、見学旅行などに参加した。週末は自由行動であったため、各自が計画を立てて様々な場所を訪問したり、現地学生と過ごすなど有意義な時間をもった。本プログラムの最後の2日間はソウル移動し国民大学校の学生との交流会を行なった。佐賀大学生との交流を希望する学生らと共に景福宮などを視察した。その後、ホテルの会議室にて双方の学生による大学および文化紹介のプレゼンテーションと活発な意見交換を行なった。また国民大学校に交換留学をしていた2人の佐賀大学生が、韓国での交換留学生としての学生生活や経済的な問題など、短期プログラム参加学生に情報提供を行い、様々な疑問や質問に応えた。長期留学への橋渡しとして有意義な時間となった。本プログラムは派遣・受入のバランスを保つため、本学学生9人は授業料不徴収で参加することができた。

【単位付与】なし

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成26年 8月7日～25日（19日間）

■参加学生 9人

名 前	所属学部・研究科	学 年
一ノ瀬友暉	経済学部	4
三浦 未来	経済学部	3
河上 結奈	文化教育学部	3
桑原 健	文化教育学部	3
古池 萌恵	文化教育学部	2
洲崎 成美	理工学部	2
西 諄子	理工学部	2
服部 菜緒	文化教育学部	1
茶園 彩	文化教育学部	1



クラスメイトと記念撮影

2.4.3 シンガポール・イマージョンプログラム

■概 要

シンガポールの国立の高等教育機関の一つである Ngee Ann Polytechnic において、多民族国家シンガポールの今を学びながら、英語力や異文化コミュニケーション能力を向上させるプログラムを実施した。シンガポールで実施するプログラムは新規であり、期間が2週間と比較的短くハードルが低く感じられたためか、派遣枠を超えた多数の応募があった。本プログラムは佐賀大学生のために特別にデザインされたもので、教室での学習、フィールドトリップ、自主課題のリサーチ、現地学生との交流などが組み込まれた。英語を学ぶことを目的としたものではなく、英語を使って学習し、現地学生と交流することを参加学生に促す授業スタイルをとった。また講義を聞くだけの授業に慣れている学生らは、主体的に授業に参加し、質問や発言を求められることが多くあったため、強いカルチャーショックを受けていた。プログラムでは、伝統的な遊び、伝統音楽など言語をあまり必要としない現地学生との交流もあり、めりはりのあるプログラムとなった。

【単位付与】 なし

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成26年9月7日～21日（15日間）

■参加学生 20人

名 前	所属学部・研究科	学 年
久保 明美	工学系研究科	M1
小林知沙子	理工学部	4
山田有里菜	理工学部	3
江口 稔季	理工学部	3
松本 清哉	理工学部	3
山下 啓太	理工学部	3
牧山 優花	文化教育学部	2
小柳 咲希	文化教育学部	2
久保田彩希	文化教育学部	2
野村 京子	文化教育学部	2
野中 啓示	経済学部	2
岩永由祐子	経済学部	2
高田慎一郎	経済学部	2
関 羅賢	理工学部	2
上利美千保	農学部	2
井口 瑤子	農学部	2
坂本 唯乃	農学部	2
福元 雄大	農学部	2
高橋 天勢	文化教育学部	1
草場 友莉	理工学部	1



インド系の教員がインド人街の解説を行う



マレー系学生と伝統音楽を楽しむ

2.4.4 カーティン大学プログラム

■ 概 要

オーストラリアの大学（カーティン大学）のシンガポールキャンパスにおいて、集中的に英語、特に聞く・話すといったオーラルスキルを向上することを目的としたプログラムを新規に立ち上げた。8月は日本の大学から北米やオーストラリアなどの大学附属の語学学校に多くの学生が派遣される。そのため、平成25年度まで実施していたモナシュ大学やパシフィック大学などではクラスメートの8割から9割を日本人学生が占めるという状況であった。カーティン大学にある語学学校で学ぶ日本人学生は1名を除いて佐賀大学生のみであった。東南アジアや東アジア諸国から来ている同世代の若者と活発な交流をすることが可能となった。語学研修以外に、本学学生のために特別に準備された多民族国家シンガポールを理解するための学外授業が行なわれ、参加学生は身につけた英語の運用能力を発揮し街頭でアンケートをとったり、その結果をまとめてクラスメートの前でプレゼンテーションを行などアクティブラーニングの機会に恵まれた。上昇志向の強いアジアの学生に日々接することで、自分の考えを相手に伝える姿勢が身に付いた様子がうかがわれた。またクラスメートやホステルで出会った世界各地の人々とのたくさんの交流体験から、文化や価値観の異なる人々と共に活動をする自信がついたようである。

【単位付与】 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成26年8月17日～9月8日（3週間）

■参加学生 4人

名 前	所属学部・研究科	学 年
井出さくら	文化教育学部	2
上野 明音	文化教育学部	2
長嶺 桃佳	理工学部	2
三苫 詩歩	文化教育学部	1



プレゼンテーションの様子

2.4.5 カーティン大学プログラム

■概 要

今年2回目の実施となった。本プログラムのねらいは、東南アジアの経済・政治の中心である多民族国家シンガポールにおいて、英語の運用能力や異文化コミュニケーション能力を向上させること、またシンガポール社会について現地大学が提供する体験型学習や日常生活を通じて学び、理解を深めることである。出発前の事前研修では、シンガポール社会の成り立ちと変遷、日本との歴史的関係、多民族社会の特徴などについての学習を行った。冬休みに課題図書を読み、シンガポールに関して得られた知識や現地で探りたい課題などについて議論した。現地では、語学能力別に配置され、3人は GENERAL ENGLISH、2人は ACADEMIC ENGLISH のコースに入り、様々な国籍の学生とともに実践的に英語を学んだ。現地で学ぶ日本人の学生は本学の学生以外に1人のみであると同時に、大学では英語のみを使用することを厳しく求められているため、佐賀大学生は自然と英語をコミュニケーションツールとして使うようになった。また佐賀大学生のみを対象とした体験型学習が提供され、繁華街で見知らぬ人に話しかけて質問に答えてもらう調査活動や、カーティン大学が準備した質問に答えながら街歩きをする学習を行った。それらの活動で得たデータをまとめ、発表するために必要な PPT スライドの作成方法やプレゼンテーションスキルについても学ぶことができ、学生は大変満足していた。帰国後の事後研修では、個々の体験を振り返り、共有しながら、3週間の濃密な体験を言語化する試みを行った。

【単位付与】 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成27年2月21日～3月16日（3週間）

■参加学生 5人

氏 名	学 部	学 年
藤田 真衣	医学部	3
田村 滉大	理工学部	2
権藤 ゆり	農学部	2
上鶴 知那	経済学部	1
宮園 沙都	経済学部	1



自主課題のための街頭アンケート

2.4.6 香港中文大学学生交流プログラム

■概要

本年度は全学部から参加があり、他学部との交流が少ない学生たちにとって佐大生同士の交流も新鮮な様子であった。渡航前にはSUSP全体の危機管理研修、北村香港中文大学教授（佐賀大学友好特使）の特別講義を含め5回の事前研修を行うとともに、スカイプを利用して香港中文大学生と事前交流も行った。現地での香港中文大学生との交流は例年通り互いに深い関係を築くものであったが、本年度はパートナーの10人の学生以外にも昨年度以前に参加した学生や興味のある学生など、ボランティア参加の学生が多く、例年以上に多くの中文大学生と交流できることとなった。現地では、博物館等の見学とともに香港中文大学の授業見学、現地高校での交流などが行われた。本プログラムは参加条件に言語能力の基準を設けていないが、中文大学の授業見学をはじめ英語を聞く／使う機会が何度かあり、なかなか自分の意思を英語で伝えられないもどかしさを感じる佐大生がそれをきっかけに英語学習への必要性を実感し、学習意欲が高まった学生が多く見られた。それに加えて、在香港佐賀県人会との意見交換会において香港で活躍する九州出身者の話を聞くことで刺激を受け、長期留学を考えるようになった学生もいた。このように、本年度は例年以上に参加者の今後のキャリアデザインや学生生活に影響を与える結果となった。

【単位付与】 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■担当教員 吉川 達 講師（全学教育機構）

■実施期間 平成27年3月1日～3月10日（10日間）

■参加学生 10人

氏名	学部	学年
松本 清哉	理工学部	3
宮津 大巳	農学部	2
平松 千紘	経済学部	2
仲摩 有紗	経済学部	2
小松 彩織	文化教育学部	1
増田 萌乃	文化教育学部	1
田中 優成	経済学部	1
中島 愛乃	経済学部	1
池田 純香	医学部	1
丹野 真衣	農学部	1



香港中文大学の学生との交流

2.4.7 オークランド大学プログラム

■概要

今年で3回目の実施となった。本プログラムのねらいは多文化環境において英語運用能力や異文化コミュニケーション能力を向上させること、およびニュージーランドの社会・文化・教育などについて学び、理解を深めることである。出発前の事前研修では、国際教育交換協議会日本代表部（CIEE）と共同で実施し、ニュージーランドについての基礎的な知識の修得、異文化適応や危機管理のトレーニング等を行った。現地では、Global English Plus というコースに入り海外の学生や日本の他大学の学生らとともに2週間の実践的な英語学習に励んだ。最終週は「ニュージーランドの人々と社会」というテーマで、佐賀大学生のみを対象として開発されたコースにおいて学習した。ここでは学校訪問やオークランド大学の学生への聞き取り調査など、現地の人々との交流を通じてニュージーランド社会を学ぶことができた。帰国後の事後研修では、学生らが言語や文化の異なる人に自分の考えを伝えることの難しさ、大切さ、楽しさを理解し、帰国後もさまざまなことに挑戦したいという意欲や自信が見られ、人間的な成長を強く感じた。

【単位付与】 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成27年3月7日～4月1日（3週間）

■参加学生 11人

氏名	学部	学年
池田 睦	経済学部	3
井出さくら	文化教育学部	2
仲 英華	文化教育学部	2
岩橋 千紘	経済学部	2
市丸 敬祐	理工学部	2
征矢野 遥	医学部	1
宮川 幸	農学部	1
内田理歩子	農学部	1
手嶋 恭子	農学部	1
松田 美紀	農学部	1
篠原 玉樹	農学部	1



グループプレゼンテーションの様子

2.4.8 浙江大学城市学院プログラム

■概要

浙江大学城市学院との連携で開発し、本年度初めて実施したものである。両大学の学生が日中両国の社会制度や文化について比較的に学び、意見交換を通じて相互理解に繋げることをねらいとしている。事前研修では、現地学生とのインターネットを利用した交流、中国社会・文化に関する基礎知識の修得、現地で行うプロジェクトの準備、危機管理研修などを行った。現地では両大学の学生が5つのテーマ（杭州・佐賀について、大学制度、茶芸・茶道、習慣とマナー、ポップカルチャー）に関する授業に参加した。現地教員が日本語で講義をした後、佐賀大学生が日本の事例を発表し、日中学生が意見交換をした。テーマに応じた視察を準備していただいた。さらに本学学生は2泊3日のホームステイを体験し、中国人の日常生活について知る機会を得た。終盤には、「多くの中国人観光客に佐賀を訪問してもらうためには？」と「日中の友好関係を築くために若者ができることは？」というテーマ設定で、アンケートや聞き取り調査を行い、最終日にグループごとに発表した。事後研修では成果を一般市民に向けて発信をする試みを行った。メディアから得られる中国のイメージにとらわれず、クリティカルに事象を読み解く力が大切だと実感した学生が多かった。また日中関係の将来を担うのは自分たちだという意識の芽生えが感じられた。

【単位付与】 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成27年3月14日～3月25日（12日間）

■参加学生 11人

氏名	学部	学年
溯上 春菜	文化教育学部	2
平岡 由妃	経済学部	2
中村 葵	経済学部	2
金沢 昂紀	経済学部	2
井手美乃里	文化教育学部	1
吉田 知加	文化教育学部	1
永尾 佳恋	文化教育学部	1
田中 夕貴	文化教育学部	1
前川 知美	文化教育学部	1
川野 修治	経済学部	1
月俣 瞳子	農学部	1



中国茶芸について博物館で学習



お世話になった先生方に感謝のメッセージを渡す

2.5 学生の海外派遣支援

2.5.1 平成26年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

番号	派遣先	派遣人数	期間	プログラム名	助成額
1	中国・杭州 浙江科技学院	6	平成26年8月7日～ 8月24日	浙江科技学院プログラム	349,920円
2	韓国・大邱 大邱大学校	9	平成26年8月7日～ 8月25日	大邱大学校プログラム	509,355円
3	シンガポール カーティン大学	4	平成26年8月17～ 9月8日	シンガポール英語研修プログラム	202,615円
4	シンガポール Ngee Ann Polytechnic	20	平成26年9月7日～ 9月21日	シンガポール イマージョンプログラム	1,482,595円
5	シンガポール カーティン大学	5	平成27年2月21日～ 3月16日	カーティン大学プログラム	293,670円
6	香港 香港中文大学	10	平成27年3月1日～ 3月10日	香港中文大学学生交流プログラム	465,660円
7	ニュージーランド オークランド大学	11	平成27年3月7日～ 4月1日	オークランド大学プログラム	1,000,000円
8	中国・杭州 浙江大学城市学院	11	平成27年3月16日～ 3月26日	浙江大学城市学院 学生交流プログラム	601,321円
合計		76			4,905,136円

2.5.2 平成26年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請9件中9件採択）

番号	学部・学科 所属	プログラム名	申請者	交流大学・機関名 派遣国	研修期間	支援人数 (派遣人数)	支援額
1	医学部	ハワイ大学臨床推論ワークショップ	小田康友 准教授	ハワイ大学医学部 アメリカ合衆国	5日間	8	400,000円
2	経済学部	国際交流演習「自然災害と国際協力： スリランカと東北の津波被害の経験から学ぶこと」	平地一郎 経済学部長	ペラデニア大学	7日間	9 (16)	450,000円
3	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America	早瀬博範 教授	スリッパリーロック大学 アメリカ合衆国	12日間	10	500,000円
4	文化教育学部	ドイツとスイスの環境／エネルギー政策を学ぶ －環境都市フライブルクを中心とする海外実習－	重竹芳江 准教授	エコステーション（ドイツ） FiBL 有機農業研究所(スイス)	12日間	9	450,000円
5	工学系研究科	建築・都市デザイン国際教育ワークショップ	三島伸雄 教授	タマサート大学・チェンマイ大学 タイ王国	9日間	10 (15)	500,000円
6	農学部	地域開発と国際協力を考えるスタディーツアー 「アジアフィールドワーク」	藤村美穂 准教授	ハノイ農業大学（ベトナム） ラオス国立大学（ラオス） 地球市民の会（ミャンマー）	7日間（ベトナム・ラオス） 7日間（ミャンマー）	10 (13)	500,000円
7	農学部	農業発展と国際協力を考えるスタディーツアー 「アジアフィールドワーク」	白武義治 教授	スリジャヤグナプラ大学 スリランカ	5日間	2	100,000円
8	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America（春期特別プログラム）	早瀬博範 教授	スリッパリーロック大学 アメリカ合衆国	11日間	9	450,000円
9	文化教育学部	第32回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行	重竹芳江 准教授	ミュンヘン大学付属語学学校 ドイツ	30日間	10	500,000円
合計						77 (92)	3,850,000円

【採択プログラムの成果報告】

1. 小田 康友 准教授（医学部）「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

ハワイ大学、韓国の学生、全国から集まった日本学生との協働・競合的環境でのワークショップにおいて、米国の実践的な学習・訓練を経験することができた。本年度の参加者が異口同音に語っていることは、自己主張の重要性である。それは、実践的な学習、訓練の現場で、一人でも多くの意見、アイデアが事態の打開のカギになることを実感し、英語への苦手意識、医学知識に対するためらいを超えて、協力し合えた経験に有しつつも、本学が実現できてない点である。

2. 平地 一郎 経済学部長 「国際交流実習 自然災害と国際協力：スリランカと東北の津波被害の経験から学ぶこと」

本学部で理論的に学んだことを実証的に経験させるべく、アジアの経済発展の現状と課題をスリランカで実見する機会を与え、ペラデニア大学では学生たちに英語で研究成果を発表させ、同大学学生との交流機会を提供し、文化や言語、習慣、宗教、民族を理解させることができた。「相互理解」中心の国際交流の発展につながった。なお、本年度の研修課題は、「事前災害と国際協力：スリランカと東北の津波被害の経験」について、東北（事前研修）およびスリランカで最も津波被害の激しかったハンバントタ県で実態調査の機会を提供している。長期的に見て、このような人的資源育成のあり方は、アジア諸国の平和や経済の安定と強化の実現に重要な役割を果たすであろう。

3. 早瀬 博範 教授（全学教育機構）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

参加した学生全員が、長期留学に関するイメージを具体的に持つことができ、そのためのとても有効な動機づけとなったことで最大の目的を達成できた。帰国後の英語インタビューテストにおいても、5月の開始時と比べてその対応の仕方、内容の充実という点で大きな伸びを確認でき、短期間ではあったが、研修の成果と言える。アメリカの大学の正規の授業に参加できた点は、しかも自分の専門に近い講義を受講できたことは長期の留学への大きなモチベーションとなっている。すでに長期の留学を目指して TOEFL 等の試験を受け始めた学生も数名いる。

4. 重竹 芳江 准教授（文化教育学部）「ドイツとスイスの環境／エネルギー政策を学ぶ -環境都市フライブルクを中心とする海外実習-」

本プログラムの最大の目的は、第二外国語として学ぶドイツ語を現地で実際に使えることを実感してもらうことであり、そのためのテーマとしてドイツが積極的に取り組んでいる問題であり、文系理系に共通する現代の課題である環境・エネルギーを取り上げた。ドイツでのエコツアー、環境教育のワークショップとともに、参加学生からの希望に応じたプログラム内容で対応してもらえたのでよかった。次年時にも柔軟に対応してもらえるようにしていきたい。現地の講師陣からも学生からの積極的な参加は非常に評価がよかった。

5. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「建築・都市デザイン国際教育ワークショップ」

バンコク市郊外のタイ独特の特徴を有する地域を視察し、タイの庶民生活の実態を知ることができた。具体的にはバンコク市南西郊外の海際にあり数年前の水害で地域が海に浸食されてしまった漁村集落、バンコクからの

鉄道の終着駅沿いに形成された鉄道マーケット（線路上に市場が浸食し、電車が通るたびに仮設物を動かしながら商売が行われている。川沿いに形成されたウォーターマーケットの3か所である。現地に1泊したので、それぞれ2回訪れて空間的な仕組みを観察するなど、調査をじっくりと行うことができた。バンコク市内の運河沿いに広がるスラム街を対象として、調査と提案作業を行った。当該対象地は近年、地下鉄新路線の計画が進められているエリアにあり、今後の開発が期待されている。一方で、スラム街住民は不法占拠とはいえども生活の継続を要求している。このような中で、どのような解決を図るかをグループ作業で検討した。日本には今日ではほとんどないスラム街を目の当たりにし、その違いに驚くとともに、タイの学生と議論しながら作業し、提案パネル2枚を作成し、英語で発表したのは、学生たちにとっても貴重な体験であり、勉強になったようである。

6. 7. 白武 義治 教授 / 藤村 美穂 准教授(農学部)「農業開発と国際協力を考えるスタディーツアー アジアフィールドワーク」

ベトナム・ラオス、スリランカでは原子の農産物流通や生活事情に関するかなり細かい情報や講義を得ることができたが、学生側の語学力が追い付いていなかったため、それらを活かすことができなかった。ミャンマーについては、南シャン州の少数民族（パオー族・インダー族）の生業活動・生活文化・自然、及び日本のNGO団体（認定NGP法人地球市民の会）による国際協力活動の実情を知るとともに、有機農業体験・植樹活動などを行い、タンボジ農業研修センターでの有機農業の体験、植樹活動と土着菌堆肥づくり、インレー湖の浮き畑とインレー湖の観光産業の見学、コミュニケーション面での問題はなかったと思われる。スリランカ、ベトナム・ラオスではそれぞれ、本学の修士課程卒業生が事前準備や、学生の生活面の世話ばかりか、現地研究機関の紹介や計画作成の上でもおおいに協力してくれた。教員にとっては、今後の研究協力や学生交流の基礎を築くことができたと同時に、学生にとっては日本語と現地語がわかる先輩、かつ帰国してそれぞれの職に就いている先輩の姿を見て、おおいに得るものがあったと思われる。

8. 早瀬 博範 教授(全学教育機構) “Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America” (春期特別プログラム)

ミニ留学として、アメリカの大学の正規の授業に参加したことが、長期留学の具体的なイメージを与え、留学の動機づけをさらに高めさせた。約13日間という短期間ではあったが、ホームステイ、大学の正規の授業参加、英語によるプレゼン、アメリカの大学生がランゲージパートナーとしての毎日の交流、ニューヨークでのフィールドワークと厳選されたプログラムの内容の良さが目に見える成果に繋がった。研修先のスリッパリーロック大学が全面的に協力をしてくれ、プログラムが予想以上にスムーズに進み、成果も期待以上であった。

9. 重竹 芳江 准教授(文化教育学部)「第32回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行」

本プログラムは、各自の興味と関心に応じた研修テーマについて下調べをし、現地で自分の力で内容を深め、広い視野を持つ学生を育てることを第一の目標にしている。これに関しては、出発まで半年をかけて準備してきたドイツ語とドイツの文化と暮らしに関する知識、また他大学との合宿研修を通じた人間的触れ合いでかなり実現できているように思う。特にコミュニケーション能力に関しては、ユースホステルの狭い部屋での共同生活によって日常では体験しないような他人との近さを感じていたようであるし、語学講習、学生チューターとのやり取り、ホームステイでのホストファミリーとの交流を通じ、しっかり目を合わせて話すことの大切さ、自分の希望を伝えるためのノウハウを身をもって体験していたようである。

2.5.3 平成26年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

番号	申請者・所属	学年	留学予定先	留学期間
1	田中 佑実 文化教育学部	4	フィンランド ユバスキュラ大学	9ヶ月
2	岡部 有紗 文化教育学部	3	アメリカ スリッパリーロック大学	10ヶ月
3	中村 有沙 文化教育学部	3	フランス ブルゴーニュ大学	10ヶ月
4	姜 珍実 経済学部	2	リトアニア ヴィタウタス・マグヌス大学	11ヶ月
5	高上穂奈美 工学系研究科	1	カナダ ウィルフリッドロリエ大学	6ヶ月

【受給者の留学成果報告】

1. 田中 佑実 (文化教育学部) ユバスキュラ大学

フィンランドへ行ったことは私の運命だったのだと感じている。1年間の留学はあっという間だったがとても中身の濃いものだった。そこに住む人たちがどのように生き、人と自然と関わり合い、何を考えて、何を大切にしているのか、1年間どっぷりとフィンランドの生活に浸ってこの目で肌で感じてきた。自分を受け入れてくれる場所、いつでも迎えてくれる人と自然があることはとても素晴らしいことである。これが留学での一番の収穫である。留学するまでは辛い。留学を始めてからはもっと辛いかもしれない。しかしその中で得るものは人それぞれ違い、それがプラスであれマイナスであれ、それぞれの考え方、生き方に必ずプラスに関わってくると考えている。

2. 岡部 有紗 (文化教育学部) スリッパリーロック大学

授業は基本的に聴講形式であるが、ディスカッションや個人の意見交換なども含まれる。学生はとてもやる気があり、先生が説明をしている間でも手を挙げて質問したり、先生もコメントに対して発言したりと積極的に取り組んでいる人が多い。支援が必要な場合はサポートを受けられる。試験を別室で受けさせてもらえたり、ノートをとる手助けをしてくれる人が付いてくれたり、先生が授業前に授業で何をするかを示したプリントをくれたりと様々である。課題の量がとにかく多く、学期中はとにかく寝る時間がないほどだった。留学は英語の勉強やほかの文化を知るだけでなく、自分を鍛えるためにもとても良いと感じられるよい体験となった。

3. 中村 有沙 (文化教育学部) ブルゴーニュ大学

フランスへ留学するにあたり、出国の飛行機がストライキでキャンセルになったり、日本からの荷物が寮まで送られてこなくて日本へ送りかえされたり思いもよらないことが沢山起こったが、おかげでどんなことをすることにとっても苦労したが、じぶんから友達を作ろうと積極的に話かけたり、週に2回自分の通う学校の他に日本語を教える教室にお手伝いとして通ったり、地域のイベントに参加したりすることで多くの友人を作ることができた。積極性がいかに大切なことで、素晴らしいかを改めて実感することができた。

4. 姜 珍実 (経済学部) ヴィタウタス・マグヌス大学

日本での授業との一番の違いはグループワークで、自分で資料を探し研究して発表することである。ネットや本を活用して必要な資料を見つけ出す方法や資料を見つけてどう読み取るかという訓練になる大事な体験であった。また多国籍で構成されているグループメンバーと協力し合っていくことも楽しい経験であった。今までなかなか会う機会のなかったアフリカやヨーロッパの国々からの学生と出会い、話し合うことでいろんな刺激を受け、物事を見る視野が広がるなどの変化が出てきたと思う。夏休みにはトルコでボランティア活動をしたり、夏休みを利用し、ポーランド、スウェーデン、ラトビアなどを旅行し、いろんな国の文化を体験することができた。リトアニアは物価が安いので予算を抑えてヨーロッパでの留学を検討するのであればリトアニアはとてもよい選択肢であると思う。

5. 高上 穂奈美 (工学系研究科) ウィルフリッドロリエ大学

留学の醍醐味はやはり勉強以外に、その国の文化を知ったり、いろんな人と関わったりする中で日々新しい発見があることだと思う。短期間であったが、経験したカナダの文化は興味深く、日々驚きの連続だった。現地の学生との交流のおかげで前よりもさらに視野が広がった気がする。しかしやはり一人で新しい環境に飛び込んで生活していくのは、正直上手くいかないことがたくさんある。いろんな失敗を繰り返したり、多くの人に手伝ってもらったりして何とか生活することができた。行く前は本当に不安だらけだったが普通に生活を送られるようになり、今となっては大きな自信につながっている。カナダで出会った人はいい方たちばかりで、これからもずっと繋がっていったらと思う。この経験はまたきっとどこかで活けると信じ、これからも英語の勉強を続けていこうと思う。

3. キャンパスの国際化

3.1 学生を対象としたセミナーの開催

本学学生の国際的な視野を醸成し、グローバルな視野で世界が直面する課題や地域が直面する問題解決に貢献できる人材育成の一環として、に従事されている社会人に本学学生を対象とした講演をしていただいた。多彩な分野で活躍されている佐賀県に縁のある方々をお招きし、セミナーを開催した。平成26年度は3回実施した。

○7月7日(月) 12:00-13:30

江頭利将氏(セイカン総合エンジニアリング総経理、上海佐賀県人会幹事長、本学友好特使)

佐賀県大町出身。早稲田大学卒業後、韓国、アルゼンチン、中国で事業を立ち上げ、現場第一主義で活動されてきた。国や文化の違いを乗り越え、キャリアを切り開く上で大切なことをエネルギーに話して下さった。地政学的に世界全体を眺めることの大切さや近い将来アナログの価値が再認識される時代なる上で重要なものについて説かれた。

○8月6日(水) 13:00-14:30

北村志帆氏(佐賀県上海デスク代表)

佐賀県佐賀市出身。神戸の大学を卒業した後、東京と上海でコンサルティングの仕事に従事され、2006年以降は佐賀県上海デスク(佐賀県庁)の代表として活躍されている。佐賀県の中国展開に大きな貢献をされている北村氏に地域と海外をつなぐ仕事の醍醐味をお話いただいた。また学生時代の失敗や苦い経験が自分を成長させ、将

来に繋がるため学生時代に様々なことに挑戦するようアドバイスをされた。

○12月15日（月）18：00～19：00

北村隆則氏（香港中文大学教授、元中香港総領事、元駐ギリシャ大使、佐賀大学友好特使）

佐賀県佐賀市出身。「アジアの国・人々にどう向き合うか」というタイトルで、多様性に富むアジア地域をどのように理解したよいか、本学学生はどのような心持ちでアジア諸国の人々と友好関係を構築していくべきなのかをお話いただいた。豊かな人的交流を基礎としたアジアの政治的、経済的安定が、世界の平和安定に重要な意味を持つことを具体的に説明していただいた。長年、外交官として第一線で活躍されてきた北村氏からのメッセージは大変示唆に富んでいた。

国際交流推進センター
グローバルセミナー

7/7(月)
12:00~
会場：
共同会議室
学生センター2階
事前登録不要
昼食持ち込み可

江頭利将氏 佐賀大学友好特使
セイカン総合エンジニアリング総経理(C.O.O.)
上海佐賀県人会幹事長

佐賀県大町出身の江頭氏は、武雄高校時代に1年間アメリカへ留学。早稲田大学卒業後に韓国、アルゼンチン、中国と22年間「アウェー」に身を置き、現場第一主義で活動されてきました。これまでのキャリア、成功・失敗経験談、ポータルに仕事をすることで大切なことについてお話しさせていただきます。

13時～ガイダンスセッション
「海外で仕事をするには?」「英語が苦手なんですけど...」
「外国人として生活するのは辛くないですか?」
皆さんの疑問・質問にお答えします。

佐賀大学国際交流推進センター 担当：山田真子 EMAIL: yama@iacc.saga-u.ac.jp

国際交流推進センターセミナー

8/6(水)
13:00~
会場：調整中(センターHPで後日お知らせ)
事前登録不要・昼食持ち込み可

北村志帆氏
佐賀県上海デスク代表

佐賀市出身の北村さんは、神戸の大学を卒業したのち東京と上海でコンサルティングのお仕事に従事されました。2004年に佐賀県庁に入庁。現在は佐賀県上海デスクの代表として活躍です。佐賀県の中国展開に大きく貢献されている北村さんのこれまでのご経験についてお聞きします。女性としてどのようにキャリアを積み進められたのか等もお話していただきます。

「驚いてお参りください!」

コンサルティングの経験、中国に関する知識と語学力を活かして中国と佐賀の橋渡し

佐賀大学国際交流推進センター 担当：山田真子 EMAIL: yama@iacc.saga-u.ac.jp

国際交流推進センター
セミナー

12/15(月)
18:00~19:00
会場：
文化教育学部
1号館・多目的室

「アジアの国・人々にどう向き合うか」
北村隆則氏
香港中文大学教授・佐賀大学友好特使
元駐香港総領事・元駐ギリシャ大使

佐賀大学国際交流推進センター 担当：山田真子 EMAIL: yama@iacc.saga-u.ac.jp

3.2 佐賀大学グローバル・リーダーズによる学生主体の国際交流活動の促進

国際交流推進センターでは、平成25年度より語学や異文化コミュニケーション能力を備えた本学学生（留学生を含む）をグローバル・リーダーズとして採用し、学生の発想や機動力を活用しながら学内の国際交流活動をセンター教職員と協働し展開してきた。採用された学生はリーダーズ研修に参加し、多様な文化や価値観を尊重しながら学習・研究・知的交流ができるキャンパスとはどのような空間かを学生自らが考え、リーダー個々が備える資質や能力を最大限に発揮できるようトレーニングを受けている。

平成26年度も交換留学からの帰国学生や留学生を中心に審査を経て選抜された10人のメンバーが活動に携わっており、1ヶ月30時間程度の活動に携わり、時間給によるチューター謝金を受け取っている。2年目を迎えた本年は、以下で述べるランゲージ・ラウンジ活動、ウェルカム・フェアウェルイベント、留学生の出身国・文化紹介、新入留学生の日本での適応支援、オープンキャンパスや留学フェア等での高校生や本学学生への働きかけなど活動内容も多様化した。また年度末の3月には、先進的な事例を学ぶために、リーダーズを東北大学に派遣し、学生がキャンパスの国際化促進に貢献している取り組みを活動に携わる学生らとの意見交換や取り組みの見学を通して学んだ。今後はグローバル・リーダーズが多くの学生のモデルロールとなり、積極的に留学生と友好を深め、学内外の国際交流活動に積極的に関与する学生が増えるよう個々の取り組みの質を上げて行く必要がある。



東北大学の学生の国際交流団体との意見交換



グローバルリーダーズメンバー

3.3 日本人学生と留学生の交流の場と機会の創出

多くの学生が多様な文化に触れる機会を常時提供しているのがランゲージ・ラウンジ活動である。上記のグローバル・リーダーズ発足前の平成24年度にパイロットとして実施し、平成25年に本格的に開始した。平成26年度も継続し、前期・後期それぞれ12週間行なった。前述のグローバル・リーダーズのメンバーが運営しており、韓国語、英語（週2回）、中国語、日本語のラウンジが学期を通して開催された。ラウンジ活動は、留学生と日本人学生が毎日昼食時間の1時間に学生センター2階の交流室に集まり、昼食を食べながら外国語での会話を楽しみ交流をする取り組みである。各ラウンジでは2人のリーダーズがファシリテーターとなり、ゲームなどのアクティビティや会話のテーマを準備している。語学の授業とは一味違った、学生ならではの思考を凝らした取り組みを行っている。参加者数は言語ごとにばらつきがあるものの、参加者の多いラウンジでは学期はじめは30人程度その後、常時20人程度の学生が参加している。より多くの学生にこの活動が認知され、積極的に参加してもらえるようになるよう周知方法や開催場所などを再検討する必要がある。



ランゲージ・ラウンジの様子

Ⅲ. 学術研究協力部門

国際交流推進センターが設立され4年目を迎え学術交流部門ではこれまで国際研究集会の開催支援と研究者海外派遣支援を行ってきた。これまで大学の国際化が叫ばれてきたが、「地域の大学」として存在意識を高めていく佐賀大学において求められている国際化とは何であるか。地域の大学である以上、地域に役立つ人材の輩出は重要な役割である。時代とともに古くなるかもしれない先進技術を身に着けるだけでなく、その背後にある学術的な知見を併せ持つ人材の育成が大学の役割かと思う。学術は国境や地域、慣習などの縛りなく論議されるものであり、その風潮を大学内に醸し出し、真に広い視野を持つ学生の育成に生かされることが大学の果たすべき役割かと思われる。学術研究の発展とともに、若い学生の視野を広げるための方策として国際交流推進センターを大いに活用することを期待する。しかしながら、支援事業への応募件数がこのところ減少しているため、多くの募集を促す取り組みが必要である。

1. 国際研究集会開催支援

平成26年度佐賀大学国際研究集会開催支援事業（申請7件中6件採択）

	氏名 所属	開催地	研究集会名	開催黄化案	参加者 数	支援金額
1	ステファニー・ホートン 准教授 文化教育学部	佐賀大学	2nd International Symposium on Native-Speakerism	平成26年9月28日～ 9月30日	50	566,847円
2	三島 伸雄 教授 工学系研究科	佐賀県鹿島市浜町	環アジア国際セミナー [日・韓・タイ・カザフ] - グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用 -	平成26年7月31日～ 8月4日	120	995,358円
3	大串 浩一郎 教授 工学系研究科	佐賀大学	第4回在来知歴史学国際シンポジウム	平成26年10月25日～ 10月28日	120	817,996円
4	ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授 経済学部	佐賀大学	国際教育研究交流事業	平成26年11月21日～ 11月27日	116	1,000,000円
5	近藤 文義 教授 農学部	アバンセ（佐賀市）	木材活用に関する国際シンポジウム	平成26年10月2日～ 10月2日	230	389,995円
6	荒木 宏之 教授 低平地沿岸海域研究センター	佐賀大学	第9回低平地に関する国際シンポジウム	平成26年9月29日～ 10月1日	157	731,332円
					合計	4,501,528円

【採択プログラムの成果報告】

1. ステファニー・ホートン 准教授（文化教育学部）“The 2nd International Symposium on Native-Speakerism”

本研究集会の目的、「母語話者主義は言葉を基準にした言語教員に対する偏見であり、問題である。それを否定するとすればいかなる条件で言語教員が将来雇用されるべきであろうか」この問題提起に対し、研究集会テーマである1. 母語話者主義についての教員、研究員個人の体験談、2. 日本語母語話者についての日本語教員の見方、3. 母語話者主義にかわるモデル—異文化コミュニケーション、共通語としての英語、世界の英語の観点から—以上の観点から発表を行い、議論を深めることができた。

2. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「環アジア国際セミナー [日・韓・タイ・カザフ] - グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用 -」

本セミナーは文部科学省「地（知）の拠点整備事業（プロジェクトF）」の一環としても実施したが、特に歴史的環境の保全・再生に関して地域に公開した学生提案発表・シンポジウムにおいては、日本・韓国・タイ・カザフスタンの研究者のみならず鹿島市周辺の地域住民を交えた議論を行うことができ、観光資源活用に向けた地域密着型の国際交流を図ることができ、佐賀大学と地域社会および行政との強力なコラボレーションによる国際交流も交えた地域課題解決に向けた成果の一端となった。

3. 大串 浩一郎 教授（工学系研究科）「第4回在来知歴史学国際シンポジウム」

我が国と中国の研究者が集まり、科学技術・経済発展を在来知という新学術概念により解明する共同シンポジウムを開催し成功裏に終えることができた。参加者として佐賀大学、清華大学、中国社会科学院等の中国研究機関研究者などが参加し学術交流を大に行うことが出来た。また、中国研究者と佐賀大学・留学生・佐賀県・佐賀市など市民との地域間交流も予定通り実施することができた。したがって評価としては期待される以上の成果が得られたと考えられる。今回で4回目となる同国際シンポジウムにおいて、初めて在来知歴史学会の総会・理事会などを開催し、今後の在来知歴史学に関する継続した取り組みを集中的に議論することができた。また、今回の特別なテーマであった産業・経済発展における公害・環境問題の現状と克服に関する在来知が果たした役割についても報告と議論が熱心に行われた。GDP世界2位と3位の中国と我が国の研究者の間でこのような学術交流が行われたことは本シンポジウムの顕著な成果であると思われる。

4. ラタナーヤカ・ピヤダーサ 教授（経済学部）「国際教育研究交流事業」

地域の国際化のために企画したスタディーツアーでは、参加した地域の方々に海外教員との行動を共にする機会を与えたことで、真の国際交流を実現することができた。佐賀が世界に開かれる地域へと発展できるきっかけづくりに貢献できたと評価している。次の5点、1. 海外協定大学の教員との共同研究について関心が高まったこと、2. 英語で発表・議論する機会となったこと、3. アジアについて理解を深める機会を提供できたこと、4. 英語で専門科目を学ぶ自信を学生に与えられたこと、5. 協定校との教育研究関係を強化したことが特筆すべき成果である。

5. 近藤 文義 教授（農学部）「木材活用に関する国際シンポジウム」

第1部の基調講演では、Dr.Sinat Koslanant（Rambhai Barni Rajabhat University）に「タイ東部カオトム林の資源の回復保全と持続可能な活用」、外崎真理雄氏（独立行政法人森林総合研究所）に「国産木材の需要－供給と土木分野の役割」と題してご講演を頂き、循環資源としての木材活用に当たっての方向性をいただいた。第2部の事例発表・ポスター発表では、12の事例発表、6のポスター発表を、「地盤補強」「実工事」「森林管理」「環境貢献」などのテーマで発表していただいた。ここでは多くのテーマに亘る発表・意見交換を通じて今後の木材活用のあり方について議論・発信できたと考えている。「木材活用に関する国際シンポジウム」は、日本で初めてのシンポジウムである。これから木材活用の機運を高め、次世代へ素晴らしい地球環境を継承できる、一つの足がかりができたと考えている。

6. 荒木 宏之 教授（低平地沿岸海域研究センター）「第9回低平地に関する国際シンポジウム」

維持管理をキーワードとした今回のシンポジウムでは最新の研究情報の発信と研究者の交流を深め、さらには3つの講演により今後の低平地の開発保全における課題を共有でき、当初の目標は十分に達成されたと評価できる。今回のシンポジウムでは本学の大学院生を含め多くの学生が参加し、各セッションや現場見学会では学生の活発な質疑応答が見られた。低平地の開発や環境に関心の高い学生や若手研究者の発掘と育成は、低平地研究の展開や深化、並びに学生の国際化を進める上で極めて重要であり、シンポジウムがそのよう場も担っていることは特記すべき成果である。

2. 研究者海外派遣支援

平成26年度佐賀大学研究者海外派遣事業（申請4件中3件採択）

	氏名・所属	国名	海外派遣機関名	派遣期間	支援金額
1	三島 伸雄 教授 林田 行雄 教授 岡崎 泰久 准教授 和久屋 寛 准教授 工学系研究科	大韓民国	牧園大學校	平成26年 8月28日～ 9月6日	931,768円
2	徳本 家康 助教 農学部	アメリカ合衆国	アリゾナ大学	平成27年 2月27日～ 10月31日	942,840円
3	高橋 智 准教授 工学系研究科	フランス オランダ	Universite Paris Diderot/ Institute for theoretical physics and Spinoza / Institute Utrecht University	平成26年11月16日～ 11月30日	532,330円
					2,406,938円

【採択プログラムの成果報告】

1. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「歴史的な地方都市における災害時要援護者支援のための ICT 活用型「防災デザイン」

- ①韓国側研究者と JSPS 二国間交流事業に採択された研究課題について、今後のスケジュールと研究遂行方法を話し合うことができた。
- ②韓国側研究者から、韓国のモデル研究地に関する文献資料、地図データなどを提供してもらうことができた。そのデータはデジタルでいただいたため、日本側研究者でも共有して使用できる状況にすることができた。
- ③現地調査では3ヶ所の研究モデル地（全州市韓屋村、牙山市、安東市河回村）の空間調査を実施し、地区屋根伏せ図、道路や建物の大きさの実測データ等を探取することができた。本予算で Wi-Fi をレンタルしたが、これを用いて Google での調査位置確認を行うことができた。
- ④市役所でのヒアリングでは、韓国の伝統的町並み等に対する保存計画、および防災対策に関する取り組みについて説明してもらうことができた。
- ⑤住民ヒアリングでは、生活実態、保存に対する考え方などをヒアリングすることができた。以上の点が特筆すべき点である。これらの成果は、修士論文などの学生教育も含め、本研究遂行のための十分な基礎資料にすることができると評価している。

2. 徳本 家康 助教（農学部）「宇宙線中性子を利用した広域土壌水分計測の革新的技術展開」

申請者の母校となるテキサス A&M 大学の協力の下、アメリカ全土からの CO₂ 発生量を評価する微気象学的研究（Ameri flux）の期間限定再稼働のための予算をテキサス A&M 大学土壌作物科学科 Heilman 教授から支援してもらうことができた。Ameri flux の研究で地表面からの蒸発散量を測定するのに必要経費は500万円とも言われ、それらの支援金によって、今後の COSMOS データの解析が進むと思われる。

3. 高橋 智 准教授 (工学系研究科)「インフレーションから暗黒エネルギーまでの宇宙進化の統一的理解に向けた理論的研究」

どちらの研究所においても、直接議論を行うことにより、大幅に共同研究が進んだ。当該研究における、具体的な解析の方法などについて議論し、今後の共同研究の方針が明確になり、また、今後のさらなる共同研究の可能性についても議論出来た。よって、非常に意義深い訪問となった。また、研究所のさまざまな研究者とも交流することができ、この点でも非常に有意義であった。今回は特に、宇宙初期に生成される密度揺らぎに関して、所謂「等曲率揺らぎ」について集中的に議論した。これまでも、等曲率揺らぎについては、様々な研究が行われているが、先行研究ではあまり議論されてこなかった、等曲率揺らぎが生成される際の詳細なプロセスを考慮することによって、最終的に生成される揺らぎの大きさが変更される可能性があることを議論した。この点は当該研究の新奇な点であり、今回の訪問での特記すべき成果である。

IV. 地域国際連携室

1. 「平成26年度産学官国際交流セミナー」の開催

7月23日、佐賀大学において「産学官国際交流セミナー」が開催され、佐賀県内の企業10社や留学生など約80人が参加した。このセミナーは、佐賀県内の企業と留学生等の間で、佐賀地域の国際化の方向性及び日本企業への就職について理解を深めることを目的として平成23年度から毎年開催されており、今年も佐賀県内の高等教育機関等、国の機関、地方公共団体、経済団体及び国際交流関係団体から構成される佐賀地域留学生等交流推進協議会の主催で、海外進出・販路拡大を目指す企業、留学生のスキルに期待する企業、また、日本企業へ就職を希望する留学生及び日本人学生を対象として開催された。

セミナーは2部構成となっており、第1部の全体セミナーでは、会長の佛淵孝夫佐賀大学学長及び佐賀県の石橋正彦農林水産商工本部長の挨拶の後、森田キャリアセンター准教授による外国人留学生の就職における現状と課題についての講演、佐賀県の新たな国際戦略の紹介があり、最後に日本の企業に就職した韓国出身の卒業生から就職体験談が語られた。会場からは質問が相次ぎ、予定時間を超えて活発な意見交換が行われた。

第2部では、会場を移して県内企業と留学生等との個別面談が行われ、留学生は真剣な表情で企業担当者から話を聴き、日本の企業についての理解を深めていた。また、会場には、韓国・カンボジア・マレーシア・ラオス出身の留学生による母国の紹介コーナーも設けられ、参加者へ各国の紹介が行われた。

【日 時】平成26年7月23日（水）13：00～15：30

【場 所】佐賀大学 理工学部6号館第講義室および2階多目的セミナー室

【プログラム】

第1部

開会

- ・主催者挨拶 佐賀地域留学生等交流推進協議会会長（佐賀大学長） 佛淵 孝夫
佐賀県農林水産商工本部長 石橋 正彦
- ・外国人留学生の就職における現状と課題
佐賀大学 キャリアセンター准教授 森田 佐知子
- ・新たな佐賀県国際戦略「世界とともに発展する佐賀県行動計画～羅針盤～」の紹介
佐賀県国際・観光部長 黒岩 春地
- ・留学生の就職体験・活動紹介
日販アイ・ピー・エス株式会社 ばく 成訓そんぶん（佐賀大学文化教育学部卒）

第2部

出展企業の個別面接及び留学生の母国紹介



全体セミナー



個別面談

2. JENESYS2.0プログラムによるインド理系大学生の訪問

一般社団法人日本国際協力センター主催 JENESYS2.0プログラムによるインド理系大学生の日本訪問プログラムの一部として、一行が本学を訪れた。訪問では、本学海洋エネルギー研究センターの池上康之教授が海洋エネルギー研究について説明し、インドとの取組みの紹介を行った。午後は、同研究センターのある伊万里サテライトに移動し、同施設を池上教授の解説とともに見学した。本庄キャンパスでは昼食時に本学在學生と交流し、一部は見学先へも同行して訪問学生との交流を深めた。

【日 時】 平成26年5月23日（金）10：00～16：00

【場 所】 大学会館2階多目的ホール

【プログラム】

挨拶 国際交流推進センター 大和武彦 副センター長

大学紹介 国際交流推進センター 高橋 彩 教授

講義 海洋エネルギー研究センター 池上康之 教授

“Future Prospect and Strategies on By-Product using OTEC for Sustainable Energy & Water Resource- International Collaboration with India and Japan”

昼食・学生交流

海洋エネルギー研究センター見学（池上康之 教授 他）

3. 「平成26年度佐賀大学就職支援セミナー」の開催

本セミナーは、本学における外国人留学生の就職支援のため、以下の目的で行われたものである。

留学生が日本での就職を考えるにあたって、就職活動の方法やいくつかの留意点を知ることにより、今後のキャリアを考える上での参考にする。キャリアセンターの利用促進のため、留学生がセンターの活動を知り、今後の就職活動に役立つ情報を得られるようにする。

実施後のアンケートからは、わかりやすいセミナーであり、就職活動の流れなど講師からの日本の就活に関する具体的な情報が参考になったようだ。参加人数の少なさから、実施日時を授業とできる限り重ならないようにするなど、今後工夫が必要であろう。

- 【日 時】** 平成27年 1月20日（火）13：00～14：30
【場 所】 大学会館 2階 多目的ホール
【共 催】 国際交流推進センター・キャリアセンター
【対 象 者】 佐賀大学の外国人留学生（短期留学生含む）
【参 加 者】 6人
【プログラム】

講演 長田祐三子氏（株式会社 ACR）

日本での就活のスケジュール、就職活動への取り組み方等
 内定留学生 2人と講師の座談会

4. 地域国際交流行事等への協力

○鹿島ガタリンピックへの留学生参加

鹿島ガタリンピック実行委員会による当行事およびホームステイへの参加依頼に対し、本学留学生の募集および行事参加への協力を行ったものである。参加者はガタリンピック開催前日に鹿島町を訪れ、町内の家庭にホームステイさせていただいた。留学生にとって、日本の家庭生活、文化を知る貴重な機会であった。翌日は「鹿島ガタリンピック」の各種競技に参加し、地域の社会と文化に触れ、参加者や町の方々と交流した。なお、開催に先立ち、佐賀大学にて実行委員会の関係者による参加者事前説明会も行われた。

- 【日 時】** 平成26年 5月24日（土）～25日（日）
【主 催】 第30回鹿島ガタリンピック実行委員会
【参 加 者】 留学生29人
【内 容】

鹿島市内でのホームステイ 5月24日（土）午後～翌朝
 「鹿島ガタリンピック」への参加 5月25日（日）

○TOMODACHI プロジェクトによる海外学生の佐賀大学訪問

認定NPO 法人地球市民の会の協力要請に応じ、アジア・パートナーシップ・プロジェクト「TOMODACHI 100」における海外大学生の日本訪問に際し、佐賀大学でのオープンカレッジと日本語弁論大会を共催した。参

加者に対し佐賀大学を紹介する機会となったと同時に、日本語弁論祭という学習機会の提供への協力を通して地域の国際交流活動に貢献した。

【日 時】 平成26年 8月22日（金）および26日（火）

【共 催】 認定 NPO 法人地球市民の会・佐賀大学国際交流推進センター

【対 象 者】 プログラムに参加する中国および韓国からの大学生26人

【佐賀大学における行事】

佐賀大学オープンカレッジ 8月22日（金）

日本語弁論祭 8月26日（火）

5. 佐賀県との連携

佐賀県との連携の一環として、平成26年6月に策定された新佐賀県国際戦略や、その実施に向けた具体的取組みおよび他の留学支援にかかわる取組みをめぐって、県庁関係者と地域国際連携室員との意見交換を行った。定期的な会合を通して個別のテーマについて相互理解を深めるとともに連携関係の強化を図った。

【日 程】

平成26年5月13日（火）第1回定例会時：佐賀県庁より5人参加

平成26年7月28日（月）第2回定例会時：佐賀県庁より2人参加

平成26年9月30日（火）第3回定例会時：佐賀県庁より3人参加

平成26年12月22日（月）第4回定例会時：佐賀県庁より3人参加

資料1：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○平成26年4月24日学長表敬

来訪者：ブラウイジャヤ大学（インドネシア）Prof. Sutrisno 氏
コンピューターサイエンス・情報技術学部長ほか3人

概要：国際交流に関する意見交換及び大学間学術交流協定への調印のため



○平成27年1月29日 学長表敬

来訪者：韓京大学校（韓国）テ ボンソク総長ほか2人

概要：大学間交流・大学改革に関する意見交換のため



○平成27年 3月16日 中島理事表敬

来訪者：ランプン大学（インドネシア）Dr. Ir. Eng. Admi Syarif 氏

（Director of Research and community Service Institute）

カントー大学（ベトナム）Dr. Nguyen Duy Can 氏

（Dean, College of Rural Development）

アンザン大学（ベトナム）Dr. Duong Van Nha 氏

（Vice Dean, Faculty of Agriculture）ほか3人

概要：国際シンポジウム開催に参加、国際交流についての意見交換のため



○平成27年 3月30日 学長表敬訪問

来訪者：ヤンゴン工科大学（ミャンマー）Prof. Nyi Hla Nge 氏 ヤンゴン工科大学大学運営諮問会議議長

Prof. Dr. Aye Myint 学長ほか2人

概要：学部間学術交流協定及び国際交流に関する意見交換のため



資料2：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先（国）	訪問先	用件	出張者名
平成26年5月7日 ～5月11日	シンガポール	カーティン大学 ネアンポリテクニク	短期海外研修プログラム開発のため	山田 直子 准教授
平成26年8月17日 ～8月20日	シンガポール	カーティン大学 ネアンポリテクニク	シンガポール集中英語研修引率、 及び短期海外研修プログラム開発のため	山田 直子 准教授
平成26年8月23日 ～8月25日	韓国	国民大学校	国民大学校との交流プログラム実施、 学生引率のため	山田 直子 准教授 寺坂 直子 事務員
平成26年9月6日 ～9月13日	シンガポール	ネアンポリテクニク カーティン大学	SUSAP シンガポール集中プログラム・ イマージョンプログラム 引率等	山田 直子 准教授 山田佳奈美 コーディネーター
平成26年11月3日 ～11月9日	ドイツ フランス	ハレ芸術大学 イデム工房 オルレアン大学	芸術学部設置に伴う国際交流関連 施設の視察、オルレアン大学との 学生交流推進に関する情報提供及 び意見交換	山田 直子 准教授 内村 太一 国際課長
平成26年11月7日 ～11月9日	台湾	元培科技大学	元培科技大学創立50周年記念 イベント参加 他	中島 晃 センター長 佐藤 武 保健管理センター長 木下翔太郎 事務員
平成26年11月21日 ～11月24日	香港	香港中文大学	平成27年3月派遣プログラム打ち 合わせ 他	吉川 達 講師
平成27年2月9日 ～2月13日	ベトナム	ハノイ国家大学	サテライトオフィスについての意 見交換、学生交流に関する情報提 供及び意見交換 他	ラタナーヤカ・ビヤダーサ 教授 山田 直子 准教授 内村 太一 国際課長
平成27年3月1日 ～3月3日	中国	香港中文大学	香港中文大学と佐賀大学の短期プ ログラム協定調印式	中島 晃 センター長 山田 直子 准教授 内村 太一 国際課長
平成27年3月1日 ～3月10日	中国	香港中文大学	平成27年春 佐賀大学・香港中文 大学交流プログラム引率	吉川 達 講師
平成27年3月3日 ～3月6日	中国	中興大学、台北大学 政治大学、東華大学 輔仁カトリック大学	学生交流促進に関する情報提供及 び意見交換、留学中の佐賀大学生 との面談	山田 直子 准教授 山田佳奈美 コーディネーター
平成27年3月8日 ～3月12日	スリランカ	ペラデニア大学 モラトゥワ大学	佐賀大学フェア in ペラデニア大学 ホームカミングデー in ペラデニ アのため	中島 晃 センター長 大和 武彦 副センター長 高島 彩 教授 内村 太一 国際課長 木下翔太郎 事務員
平成27年3月16日 ～3月19日	中国	浙江大学城市学院 浙江科技学院 浙江理工大学	浙江大学城市学院プログラム引率、 及び交流協定に基づく学生派遣と 受入に関する情報提供及び意見交 換	山田 直子 准教授 山田佳奈美 コーディネーター
平成27年3月25日 ～3月28日	中国	浙江大学城市学院	浙江大学城市学院プログラムプロ ジェクト成果発表・修了式	山田 直子 准教授

資料3：平成26年度 留学生数

(平成26年5月1日現在)

学部等 Faculties	学部 Undergraduates					大学院 Graduate Schools			
	文化教育学部 Faculty of Culture and Education	経済学部 Economics	医学部 Medicine	理工学部 Science and Engineering	農学部 Agriculture	修士課程（博士前期） Master's Course			
						教育学研究科 Education	教育学研究科 Economics	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering
国名 Countries									
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal									
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh									
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka							1		
タイ王国 Kingdom of Thailand									3
マレーシア Malaysia	1	1		17					
インドネシア共和国 Republic of Indonesia									
大韓民国 Republic of Korea		1		3		1			
モンゴル国 Mongolia		1							
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	5					4			
中華人民共和国 People's Republic of China	6	23		9	3	11	8		7
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia						1	1		
台湾 Taiwan			1						
イラン・イスラム共和国 Islamic Republic of Iran									
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt						1			
アメリカ合衆国 United States of America						1			
フランス共和国 French Republic									
オーストラリア Commonwealth of Australia									
アルメニア共和国 Republic of Armenia									
スウェーデン王国 Kingdom of Sweden									
ベルギー王国 Kingdom of Belgium									
ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic									
計 Total	12	26	1	29	3	19	10	0	10

国名 Countries	大学院 Graduate Schools						研究生 科目等 履修生 特別聴講 学生 Research Part-Time Students Special Audit	鹿児島大学 大学院連合 農学研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University	日本語研修 コース Intensive Japanese	合計 Total	
	学部等 Faculties	修士課程 (博士前期) Master's Course	博士課程 Doctoral Course	博士後期 Doctoral Course	特別コース 博士前期／修士 PSJP Course Master's						特別コース 博士後期 PSJP Course Doctoral
	農学研究科 Agriculture	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	農学研究科 Agriculture	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering					
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal			1			1				2	
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	1		2			2	1	1		7	
スリランカ民主主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka			2			1	2	2		8	
タイ王国 Kingdom of Thailand				1	1	1	4			10	
マレーシア Malaysia			2							21	
インドネシア共和国 Republic of Indonesia			3	2	1	4	4	3		17	
大韓民国 Republic of Korea	1		1				8			15	
モンゴル国 Mongolia										1	
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam			2				2			13	
中華人民共和国 People's Republic of China	2	1	14			2	21	1		109	
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia							2			4	
台湾 Taiwan							13			14	
イラン・イスラム共和国 Islamic Republic of Iran						1				1	
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt										1	
アメリカ合衆国 United States of America							1			2	
フランス共和国 French Republic							2			2	
オーストラリア Commonwealth of Australia							1			1	
アルメニア共和国 Republic of Armenia							1			1	
スウェーデン王国 Kingdom of Sweden							1			1	
ベルギー王国 Kingdom of Belgium							1			1	
ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic							1			1	
計 Total	4	2	27	3	2	12	65	7	0	232	

資料4：大学間学術協定校一覧

(平成27年3月現在)

No.	国名	大学名	国公私等
1	大韓民国	全南大学校	国立
2		安東大学校	国立
3		国民大学校	私立
4		釜山大学校	国立
5		木浦大学校	国立
6		釜慶大学校	国立
7		済州大学校	国立
8		韓国技術教育大学	国立
9		光州女子大学校	私立
10		培材大学校	私立
11		牧園大学校	私立
12		大邱大学校	私立
13	中華人民共和国	華東師範大学	国立
14		北京工業大学	国立
15		首都師範大学	国立
16		中国農業大学	国立
17		遼寧師範大学	国立
18		ハルビン工業大学	国立
19		華東理工大学	国立
20		浙江理工大学	国立
21		西南政法大学	国立
22		浙江科技大学	国立
23		遼寧大学	公立
24	台湾	輔仁カトリック大学	私立
25		国立政治大学	国立
26		国立中興大学	国立
27		国立台北大学	国立
28		国立東華大学	国立
29		元培科技大学	私立
30		国立連合大学	国立
31		文藻外語大学	私立
32	ベトナム	ベトナム国家農業大学	国立
33		ノンラム大学	国立
34		ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	国立
35		ビン大学	国立
36		ベトナム国家大学ハノイ校自然科学大学	国立
37		ベトナム国家大学ハノイ校工科大学	国立
38		アンザン大学	国立
39	カンボジア	プノンベン王立法経大学	国立
40		王立農業大学	国立
41		王立プノンベン大学	国立

42	ラオス人民民主共和国	ラオス国立大学	国立
43	タイ王国	カセサート大学	国立
44		コンケン大学	国立
45		チェンマイ大学	国立
46		アジア工科大学	国立
47		モンクット王ラカバン工科大学	国立
48		タマサート大学	国立
49		インドネシア共和国	ハサヌディン大学
50	ガジャマダ大学		国立
51	サム ラツランギ大学		国立
52	リアウ イスラム大学		私立
53	スリビジャヤ大学		国立
54	ダルマプルサダ大学		私立
55	セベラスマレット大学		国立
56	ジュアンダ大学		私立
57	マラン国立大学		国立
58	ボゴール農業大学		国立
59	ジャカルタ国立大学		国立
60	ブラウイジャヤ大学	国立	
61	バングラデシュ人民共和国	バングラデシュ工科大学	国立
62		ラジャヒ大学	国立
63		バングラデシュ農科大学	国立
64		ジャハンギールナガール大学	国立
65		チッタゴン工科大学	国立
66		ダッカ工科大学	国立
67	スリランカ民主社会主義共和国	ベラデニア大学	国立
68	パキスタン・イスラム共和国	コハート科学技術大学	国立
69		ペシャワール大学	国立
70	英国	グラスゴー大学	国立
71	ルーマニア	アレクサンドルイオンクザ大学	国立
72	フランス共和国	ブルゴーニュ大学	国立
73		オルレアン大学	国立
74	ポーランド共和国	ルブリン工科大学	国立
75	リトアニア共和国	ヴィタウタスナグヌス大学	国立
76	アメリカ合衆国	アンダーソン大学	私立
77		カリフォルニア大学デイビス校	州立
78		パシフィック大学	私立
79		スリッパリーロック大学	州立
80	カナダ	マニトバ大学	国立
81		ウィルフリッド・ロリエ大学	国立
82	オーストラリア連邦	ラトローブ大学	国立
83		シドニー工科大学	国立
84	フィンランド共和国	ユバスキュラ大学	国立

計 20カ国・地域 84大学

資料5：平成26年度 国際交流推進センター関連行事

H26	佐賀大学生の派遣・教育・支援	留学生に対する教育・支援	国際交流推進事業
4月	16日 留学フェア2014	2日 新入留学生オリエンテーション 日本語コースプレースメントテスト 4日 日本語コースオリエンテーション SPACE オリエンテーション 7日 2014年度 SPACE 入学式 19日 新入留学生研修旅行（～20日 嬉野市） 26日 SPACE-E フィールドワーク（福岡市太宰府市）	30日 第1回 国際交流推進センター運営委員会
5月		21日 留学生健康診断（～22日まで） 23日 新入留学生歓迎会	29日 第2回 国際交流推進センター運営委員会
6月		6日 消防訓練（国際交流会館） 28日 SPACE-E フィールドワーク（鳥栖市朝倉市）	26日 第3回 国際交流推進センター運営委員会
7月	7日 グローバルセミナー 佐賀大学友好特使江頭利将氏講演	1日 佐賀大学サマープログラム（～18日） 5日 SPACE-J フィールドワーク（伊万里市） 7日 香港中文大学サマープログラム（～16日）	4日 国立大学法人留学生センター留学生指導担当研究協議会 23日 佐賀地域留学生等交流推進協議会総会 産学官国際交流セミナー 30日 第4回 国際交流推進センター運営委員会
8月	6日 グローバルセミナー 北村志帆氏講演 7日 浙江科技学院(中国)研修派遣（～24日まで） 大邱大学校(韓国)研修派遣（～25日まで） カーティン大学（シンガポール）研修派遣（～9月8日まで）	3日 栄の国まつり参加 7日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム終了式	28日 佐賀地域外国人留学生援助会理事会
9月	7日 ネアンポリテクニク（シンガポール）研修派遣（～21日まで）	25日 日本語コース プレースメントテスト 29日 日本語コース オリエンテーション 30日 SPACEプログラム オリエンテーション 日本語・日本文化研究生オリエンテーション	18日 第5回 国際交流推進センター運営委員会
10月	海外留学月間 1日 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム説明会 8日 平成25年度交換留学成果報告会 22日 平成25年度アジアで活躍できるリーダー養成プログラム成果報告会 29日 SUSAP 2014 Summer 成果報告会	1日 SPACE・日本語・日本文化研究生入学式 8日 新入留学生オリエンテーション 18日 新入留学生研修旅行（～19日 唐津市） 22日 留学生健康診断 25日 SPACE-E フィールドワーク（熊本市） 29日 交通安全講習会	23日 第6回 国際交流推進センター運営委員会
11月		16日 佐賀地域外国人留学生援助会主催スタンプラリー（吉野ヶ里） 29日 SPACE-J フィールドワーク（鹿島市）	3日 ドイツ・フランス出張（～9日まで） 7日 元培科技大学訪問（創立50周年式典） 全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議 26日 環黄海産学官連携大学長フォーラム（～27日まで）
12月	15日 グローバルセミナー 佐賀大学友好特使北村隆則氏講演	17日 被爆体験講話	4日 第7回 国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 11日 国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会（～12日） 25日 第8回 国際交流推進センター運営委員会
H27 1月		20日 留学生のための就職支援講演会 31日 SPACE-E フィールドワーク（小城市）	15日 第9回 国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 23日 第10回 国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
2月	21日 カーティン大学（シンガポール）研修派遣（～3月16日まで）	17日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム修了式	9日 ハノイサテライト訪問（～13日 ベトナム） 10日 第11回 国際交流推進センター運営委員会 20日 第12回 国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
3月	1日 香港中文大学研修派遣（～10日まで） 7日 オークランド大学（ニュージーランド）研修派遣（～4月1日） 16日 浙江大学城市学院（中国）研修派遣（～28日まで）		1日 香港中文大学訪問（協定書締結 ～3日まで） 6日 国立大学法人国際協力関係センター長等会議 8日 スリランカ海外校友会（～12日まで） 23日 第13回 国際交流推進センター運営委員会

資料6：国際交流推進センター規則

(平成23年9月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年4月1日制定）第11条の7第2項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、国立大学法人佐賀大学（以下「本学」という。）の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流の進展に寄与することを目的とする。

(室及び部門並びに業務)

第3条 センターに、前条に掲げる目的を達成するため、国際交流企画推進室及び地域国際連携室並びに学生交流部門及び学術研究交流部門を置く。

2 国際交流企画推進室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際戦略構想に基づく国際交流事業の企画推進に関すること。
- (2) 本学が海外に置くサテライトの整備、活用の施策・立案・実施に関すること。
- (3) 重点交流大学の選定に関すること。
- (4) 海外教育研究機関等との学術交流の協定及び学生交流の協定締結に関すること。
- (5) 国際交流の危機管理体制の整備に関すること。
- (6) 国際交流機関との連携に関すること。
- (7) 国際広報に関すること。
- (8) 卒業又は修了した留学生のネットワークの構築に関すること。
- (9) 海外教育研究機関等の情報収集及びコーディネート業務に関すること。
- (10) その他国際交流に関すること。

3 地域国際連携室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 地域社会及び産業界との国際交流推進のための連携・協力に関すること。
- (2) 佐賀県、市町村、産業界、各種団体等と連携した国際交流事業の企画・立案・実施に関すること。
- (3) 地域連携の国際ワークショップ等の企画・立案・実施に関すること。
- (4) 地域社会、産業界、各種団体と連携した留学生の奨学基金事業の実施に関すること。
- (5) 留学生の企業等のインターンシップ受入先の開拓に関すること。
- (6) 留学生の就職活動支援に関すること。
- (7) 地域社会と連携した留学生の支援に関すること。
- (8) 佐賀地域留学生等交流推進協議会の運営に関すること。
- (9) 留学生、地域社会、産業界及び各種団体とのコーディネート業務に関すること。
- (10) 地域への広報に関すること。
- (11) その他地域国際連携に関すること。

4 学生交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 留学生受入れプログラムの開発支援に関すること。

- (2) 奨学金、宿舎等の留学生受入環境及び学生派遣環境の整備に関する事。
- (3) 重点交流大学とのジョイントプログラムの企画推進に関する事。
- (4) 国際教育プログラムの実施支援に関する事。
- (5) 海外教育研究機関等との学生交流の協定締結支援に関する事。
- (6) 留学生の生活指導及び相談に関する事。
- (7) 学生の派遣先の情報収集及び開拓に関する事。
- (8) 留学生の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関する事。
- (9) 留学生の受入業務及び学生の派遣業務に関する事。
- (10) 派遣学生の査証取得等の在留手続支援業務に関する事。
- (11) 外国人留学生宿舎の管理運営に関する事。
- (12) その他学生交流に関する事。

5 学術研究交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 海外教育研究機関等との共同研究の促進に関する事。
- (2) 海外教育研究機関等との学術交流協定の締結支援に関する事。
- (3) 研究成果等の国際社会への情報発信に関する事。
- (4) 国際シンポジウム、国際セミナー等の企画・立案・実施に関する事。
- (5) 国際研究ネットワークの整備に関する事。
- (6) 研究者の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関する事。
- (7) 研究者の受入業務及び派遣業務に関する事。
- (8) 派遣研究者の査証取得等の在留手続支援業務に関する事。
- (9) 外国人研究者宿舎の管理運営に関する事。
- (10) その他学術研究交流に関する事。

(鍋島サテライト)

第4条 センターに、鍋島地区における国際交流業務を遂行するため、鍋島サテライトを置く。

2 鍋島サテライトの業務に関し、必要な事項は、別に定める。

(職員)

第5条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 鍋島サテライト長
- (4) 室長及び部門長
- (5) 専任の教員
- (6) 併任の教員
- (7) 契約コーディネーター
- (8) その他必要な職員

(センター長)

第6条 センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、本学の国際交流事業を統括する。

- 3 センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第7条 副センター長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

- 2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。
- 3 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(鍋島サテライト長)

第8条 鍋島サテライト長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

- 2 鍋島サテライト長は、センター長及び副センター長を補佐し、鍋島サテライトの業務を掌理する。
- 3 鍋島サテライト長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 鍋島サテライト長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(室長及び部門長)

第9条 室長及び部門長は、センターの専任の教員又は併任の教員のうちから、センター長が指名した者をもって充てる。

- 2 室長及び部門長は、室及び部門の業務を掌理する。
- 3 室長及び部門長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 室長及び部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(国際コーディネーター)

第10条 センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任の教員及び契約コーディネーターをもって充てる。

- 2 国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

(専任の教員及び契約コーディネーターの選考)

第11条 専任の教員及び契約コーディネーターの選考は、第14条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

(併任の教員)

第12条 併任の教員は、センター長及び部局長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て、学長が任命する。

- 2 併任の教員は、室及び部門に配置し、国際コーディネーターと協働して、室及び部門の業務を処理する。
- 3 併任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(国際マネージャー)

第13条 センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

- 2 国際マネージャーは、国際コーディネーター並びに室及び部門との調整を図る。

(運営委員会)

第14条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）

を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (2) センターの人事に関する事項
- (3) 本学の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (4) センターの予算及び決算に関する事項
- (5) 室及び部門での企画・立案に関する事項
- (6) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第15条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) 副センター長
 - (3) 鍋島サテライト長
 - (4) 室長及び部門長
 - (5) 専任の教員（国際コーディネーター）
 - (6) 各学部（理工学部を除く。） から選出された教員 各1人
 - (7) 工学系研究科から選出された教員 1人
 - (8) 全学教育機構から選出された教員 1人
 - (9) 教養教育運営機構から選出された教員 1人
 - (10) 留学生センターから選出された教員 若干人
 - (11) 契約コーディネーター（国際コーディネーター）
 - (12) 学術研究協力部国際課長（国際マネージャー）
- 2 前項第6号から第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第6号から第10号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第16条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第17条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要とする。

(専門委員会)

第18条 運営委員会に、専門的事項を審議するために、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

(意見の聴取)

第19条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第20条 センター及び運営委員会の事務は、学術研究協力部国際課が行う。

(雑則)

第21条 この規則に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。
- 2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

資料7：国際交流推進センター名簿

(平成26年4月1日現在)

国際交流推進センター長	中島 晃	理事
国際交流推進副センター長	大和 武彦	教授
国際コーディネーター	高橋 彩	教授
国際コーディネーター	山田 直子	准教授
国際コーディネーター	山田佳奈美	

国際交流推進センター運営委員会委員

青木 洋介	教授・鍋島サテライト長
ラタナーヤカ・ピヤダーサ	教授・国際交流企画推進室長
高橋 彩	教授・地域国際連携室長
山田 直子	准教授・学生交流部門長
杉山 晃	教授・学術研究交流部門長
山崎 功	教授（文化教育学部）
中西 一	教授（経済学部）
熊本 栄一	教授（医学部）
村松 和弘	教授（工学系研究科）
濱 洋一郎	教授（農学部）
早瀬 博範	教授（全学教育機構）
古賀 弘毅	准教授（全学教育機構）
中山亜紀子	准教授（全学教育機構）
辻 一成	准教授（農学部）
内村 太一	（国際課長・国際マネージャー）
山田佳奈美	（国際コーディネーター）

国際交流企画推進室

ラタナーヤカ・ピヤダーサ	教授・室長（経済学部）
大和 武彦	副センター長（国際交流推進センター）
高橋 彩	教授（国際交流推進センター）
山田 直子	准教授（国際交流推進センター）
早瀬 博範	教授（文化教育学部）
後藤 正英	准教授（文化教育学部）
高野 吾朗	准教授（医学部）
萩原 世也	教授（工学系研究科）
辻 一成	准教授（農学部）
古賀 弘毅	准教授（全学教育機構）

学生交流部門

山田 直子 准教授・部門長（国際交流推進センター）
 大和 武彦 教授（国際交流推進センター）
 高島 彩 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 重竹 芳江 准教授（文化教育学部）
 早川智津子 教授（経済学部）
 小田 康友 教授（医学部）
 村松 和弘 教授（工学系研究科）
 上野 大介 准教授（農学部）
 丹羽 順子 准教授（全学教育機構）
 中山亜紀子 准教授（全学教育機構）

鍋島サテライト

青木 洋介 教授
 熊本 栄一 教授
 小田 康友 教授
 高野 吾朗 准教授

学術研究協力部 国際課職員

課長 内村 太一
 副課長 吉岡 邦浩
 係長 宮原 茂幸
 係長 副島加代子
 事務員 木下翔太郎
 事務員 坂本 輝
 事務補佐員 野口 尊子
 事務補佐員 寺坂 直子
 事務補佐員 一ノ瀬明子
 国際アソシエイト 張舒

学術研究協力部門

杉山 晃 教授・部門長（工学系研究科）
 大和 武彦 教授（国際交流推進センター）
 高島 彩 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 熊本 栄一 教授（医学部）
 大渡 啓介 教授（工学系研究科）
 濱 洋一郎 教授（農学部）

地域国際連携室

高島 彩 教授・室長（国際交流推進センター）
 大和 武彦 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 山崎 功 教授（文化教育学部）
 戸田順一郎 准教授（経済学部）
 柴 錦春 教授（工学系研究科）
 山中 賢一 准教授（農学部）
 布尾勝一郎 准教授（全学教育機構）
 吉川 達 講師（全学教育機構）

平成26年度年報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University

840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学 国際交流推進センター

電話：0982-28-8589

Fax：0952-28-8819

<http://www.irdc.saga-u.ac.jp/>